加賀市田尻シンペイダン遺跡
発掘調査報告書

— 県営圃場整備事業(橋立地区)関係埋蔵文化財調査報告書 —

1979・3

石川県教育委員会

例　　言

Ⅰ　本書は石川県教育委員会が県営圃場整備事業（橋立地区）に先だち国庫補助金を受け、昭和53年度に行った、加賀市田尻シンペイダン遺跡の発掘調査報告書である。

Ⅱ　調査期間　昭和53年９月26日～12月11日

Ⅲ　調査指導員

高堀　勝喜（石川考古学研究会々長）

牧野　隆信（加賀市史編集委員長）

野尻与之佐（県立大聖寺高等学校教諭）

Ⅳ　調査担当者

田島　明人　　平田　天秋　　端野　英子（以上県文化財保護課主事）

Ⅴ　調査協力者

加能　　稔（金沢大学々生）加賀市田尻町・小塩辻町有志

Ⅵ　本書の編集・執筆は調査担当者協議の上、田島が行った。なお、遺物の項の白磁については平田がとりまとめた。また、報告書作成にあたっては、上記調査指導員の他、吉岡康暢（石川県立郷土資料館　資料課長）浅香年木（国立石川工業高等専門学校助教授）東野外志雄（石川県白山自然保護センター技師）亀井明徳（九州歴史資料館）石松好雄・横田賢次郎（以上福岡県文化課）石川県工業試験所より教示を受けている。

目　　次

1　遺跡の位置と歴史的環境……1

2　調査の経緯……2

3　遺　　構……5

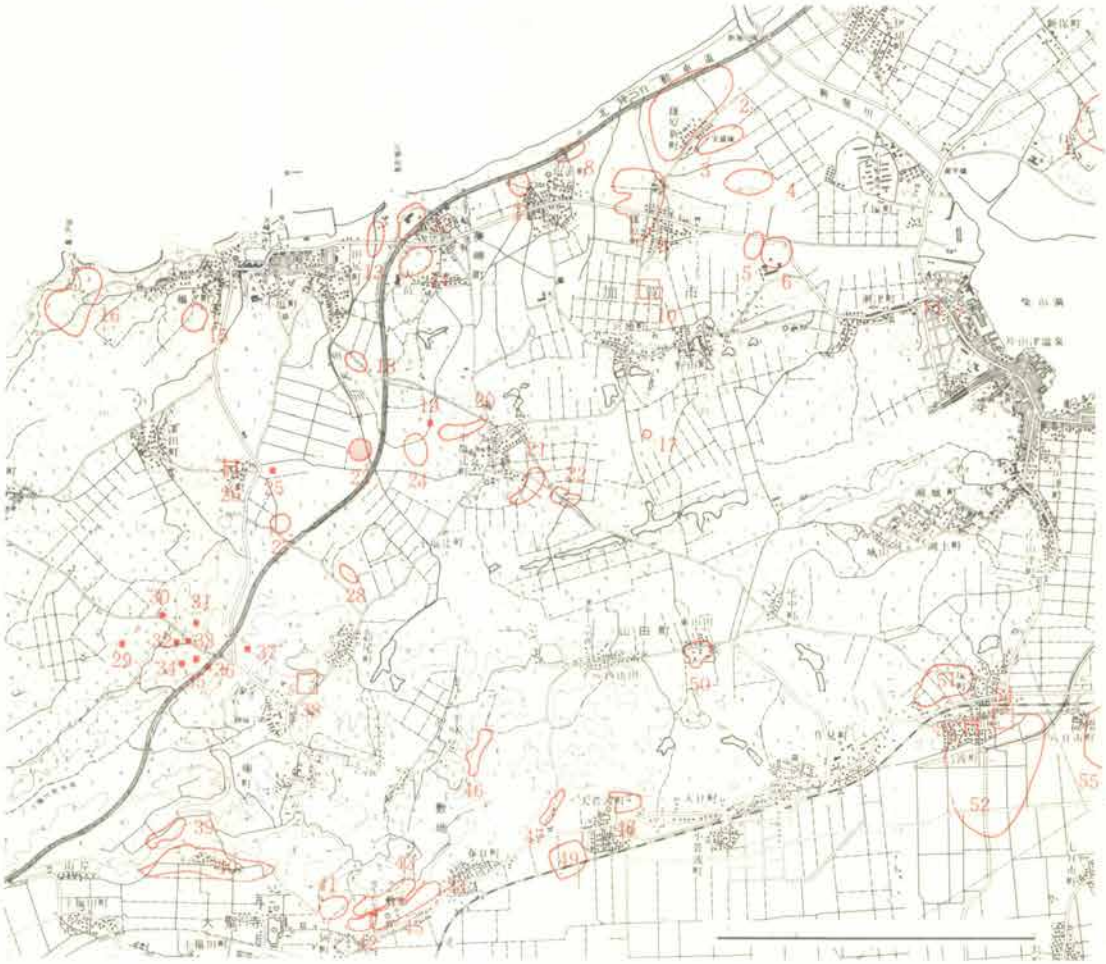
4　遺　　物……17

5　小　　結……40

1.遺跡の位置と歴史的環境

位置　本遺跡は加賀市田尻町通称シンペィダンに在る。

本遺跡の位置する橋立台地は、江沼盆地と日本海との間に在る標高50～60m前後の海成段丘で、東西幅約8km、南北幅約5kgを測る。この台地上には幾条もの小河川が認められ、これら河川によって形成された年歯状の小谷平野が複雑に入り組んで、起伏に富んだ分散的な地理的環境を作り出している。



第1図　周辺の遺跡分布図

1．一白A遺跡
2．篠原新遺跡
3．篠原新神社遺跡
4．篠原（城跡）遺跡
5．片山津中学校裏遺跡
6．潮津上出遺跡
7．潮津神社
8．塩浜海岸B遺跡
9．篠原遺跡
10．宮地廃寺
11．塩浜白山神社前遺跡
12．美岬・子崎遺跡
13．田尻川遺跡
14．美岬・太宮遺跡
15．橋立神社裏遺跡
16．大野山遺跡
17．宮地大鞍桑遺跡
18．田尻ドウヤマ遺跡
19．小塩辻製鉄跡
20．小塩辻C遺跡
21．小塩辻D遺跡
22．小塩辻E遺跡
23．田尻シンペイダン遺跡
24．小塩辻タンジリ遺跡
25．宮製鉄跡
26．宮村岩部神社
27．宮遺跡
28．高尾遺跡
29．黒崎製鉄跡
30．豊町製鉄跡
31．豊町2号製鉄跡
32．豊町タカイ山1号製鉄跡
33．豊町タカイ山2号製鉄跡
34．豊町3号製鉄跡
35．豊町ひょうたん池1号製鉄跡
36．豊町ひょうたん池2号製鉄跡
37．高尾製鉄跡
38．高尾廃寺
39．極楽寺跡
40．堀遺跡
41．岡A遺跡
42．岡B遺跡
43．敷地天神山遺跡
44．敷地町後方遺跡
45．菅生石部神社
46．平床遺跡
47．大菅波A遺跡
48．大菅波C遺跡
49．大菅波D遺跡
50．東山田八幡神社遺跡
51．富塚遺跡
52．弓波遺跡
53．弓波廃寺
54．忌浪神社
55．橋橋遺跡

本遺跡は橋立台地の北西縁に近いこれら小谷平野の一つ、田尻川によって形成された小谷平野左岸の微高地上に位置する。田尻川は北流して日本海へそそぐ、当該地域ではもっとも大きな河川で、流跡約4㎞を測る。遺跡の位置する付近は幅0.3～0.5㎞程度の細長い谷平野が形成され、その縁辺には比高20～30m程度の丘稜が谷平野に向って突き出し、枝分れした谷水田が随所に認められる。また、当遺跡の下流跡の下流約0.5㎞の所で谷平野が袋状に狭まって流路を遮ぎっていることから、当該地は水はけの悪い沼に近い湿田地帯でもある。

2.調査の経緯(発掘日誌)

昭和53年9月27日　昭和53年8月10日～8月11日にかけて実施した分布調査の成果を踏え、東西約50m、南北約130mの微高地部分を遺跡範囲と想定して調査に着手した。

9月27日～10月5日　遺物散布の比較的濃密な、微高地北辺部を起点に南北約90m、東西約30m、巾はともに2mの十字形のトレンチを設定。包含層はほとんど確認められなかったが、全区域で遺構を検出し、先述の微高地全域に占地した遺跡であることを確認。

10月6日～10月17日　トレンチ調査の結果を踏え、水田造成の為の削平部分を中心として第1調査区を設定。重機による表土除去作業と併行して遺構検出作業に取りかかる。

10月18日　01建物検出

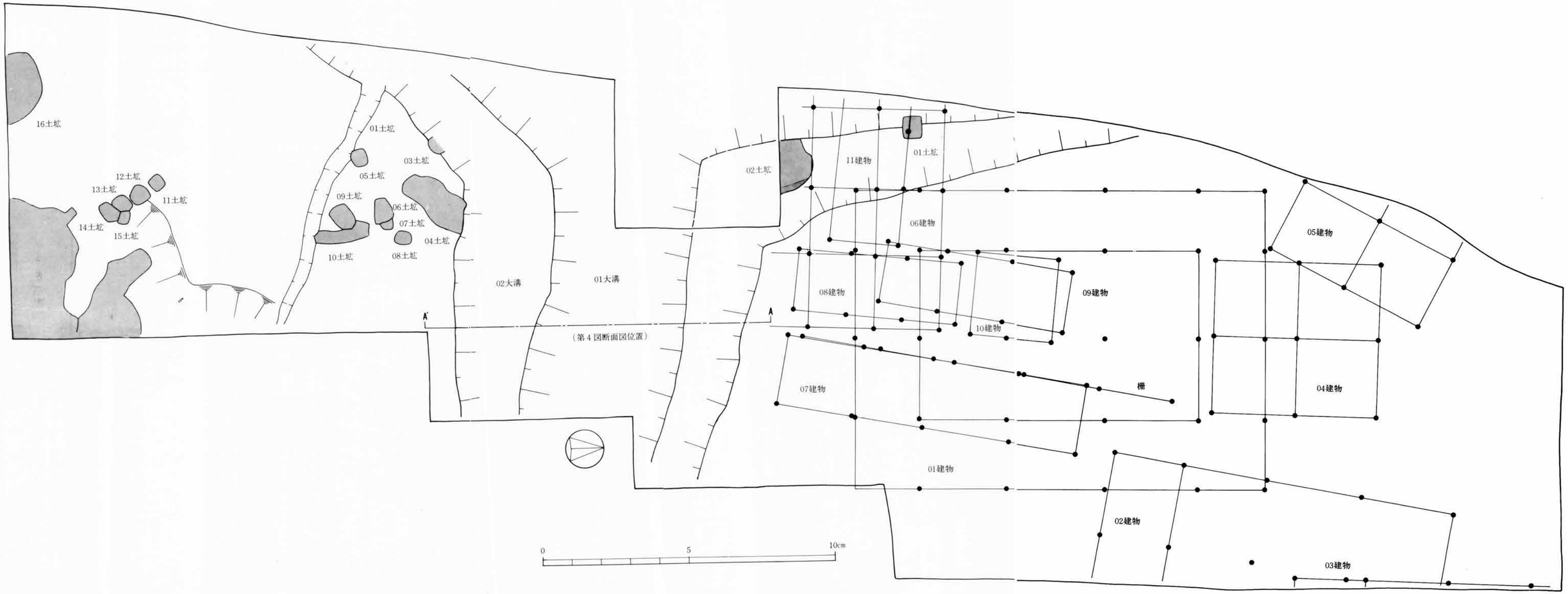
10月23日～10月26日　01・02大溝、01・02・03土坑検出。11～12世紀頃の製鉄関連遺跡と判明。

10月31日～11月10日　01・02大溝の調査に集中。01大溝内より土師器・須恵器の他、多量の木器・自然遺物・鉱滓・磁器も検出。この時点で大溝が01・02大溝からなり、遺物は01大溝に集中することを確認。また、遺跡の構成が大溝を境として建物跡のある北辺部分の「居住域」と、南辺の「工房域」からなることを確認。

11月11日～11月20日　北辺の「居住域」部分の柱穴群の精査と併行し、南辺の「工房域」の遺構検出作業及び発掘作業にかかる。「居住居」では01建物の他、04建物を確認、その後の整理作業では総数11棟を確認したが、現地では先の2棟以外は判明しなかった。また、「工房域」では13基の土坑、1本の溝及び不定形の遺構群を確認。

11月21日～11月29日　調査区全域の記録作製に併行し、第2調査区を設定し大溝の東辺部を確認。また、大溝の精査を行う。大溝中より舟形模形・刀子鞘等の木器を検出するとともに、純銀製の「㊍」刻印を持つ延べ板状品を検出。

11月29日　調査記録の最終点検及び調査器材・遺物を収納し調査を終了する。調査期間は延31日。

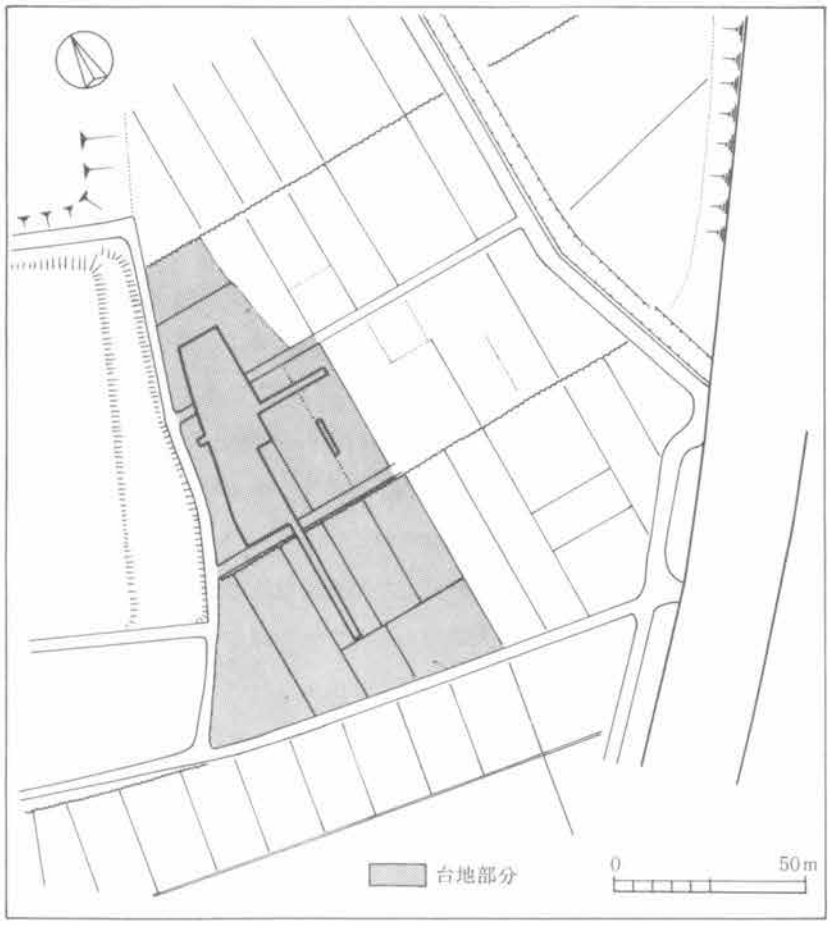

16土坑
12土坑
13土坑
11土坑
14土坑
15土坑
01土坑
03土坑
05土坑
09土坑
06土坑
07土坑
04土坑
10土坑
08土坑
02大溝
01大溝
A'
A
（第４図断面図位置）
02土坑
11建物
01土坑
06建物
08建物
09建物
10建物
07建物
柵
05建物
04建物
01建物
02建物
03建物
0
5
10cm

第３図　主要遺構分布図

3.遺　　構

1）遺跡の立地　遺跡は田尻川左岸にある微高地上に立地する。

この微高地は東西約50m、南北約130mを測り、前面の水田とは1～2m程度の比高差を持つ。背後は現在は比高差5m程度の水田となっているが、かっては比高差10～20mの丘稜に続いていたものと推定され、小規模ながらも地形的に周囲を区割された小地域を形成している。



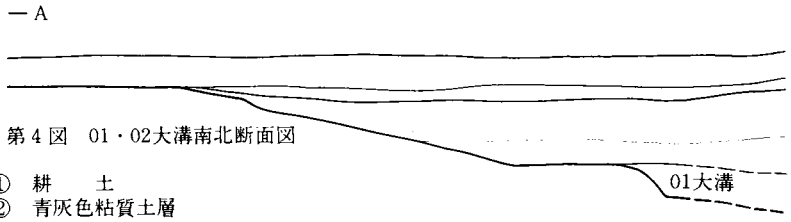
第2図　調査区配置図

2）遺構　調査区全域で遺構を検出した。検出した遺構には、掘立柱建物11棟分、柵1基、土坑16基、大溝2条、溝1条、不定形遺構1基及び若干のピットが有る。

遺構分布は、微高地を2分割する形で01・02大溝が「T」字状にめぐり、その北辺部に掘立柱建物11棟分、柵1基、土坑2基が分布。また南辺部には1条の溝と不定形遺構1基及び14基の土坑と若干のピットが認められた。

これら遺構の構成は01・02大溝を境として北辺部の「居住域」と南辺部の「工房域」からなるものと推定されるが、南辺部の「工房域」については、当該部分に集中して認められた土坑の性格が不明なため、その具体的な在り方は充分求明できなかった。

なお、当遺跡では平安時代末期の遺物の他、6世紀、9世紀、室町時代及び近世の遺物を検出



第４図　01・02大溝南北断面図

① 耕　　土
② 青灰色粘質土層
③ 暗褐色粘質土層
④ 暗青灰粘質土層（02大溝覆土、遺物希少）
⑤ 〃　（　〃　〃　、木炭・地山ブロック若干含む）
⑥ 〃　（01大溝覆土、砂粒若干含む、木炭・遺物多量含む）
⑦ 黄褐色砂層　（　〃　）

しているが、検出した遺構は総て平安時代末期のものと推定された。

大溝

01大溝　微高地のほぼ中央部を「Ｔ」字状に走る。全貌は確認していないが、微高地背後の丘陵裾部に沿って南北に伸び、その中央部より東方向に第２調査区を経て微高地先端部まで伸びている。また、この大溝はその位置からみて、自然地形をほとんど利用せずに造作されたものと推定された。

幅は上方が02大溝に切られたため明らかでないが、現存幅約４ｍを測る。深さは溝底に40cm程度の覆土を残しているが、建物群の遺構面から推定して約１ｍ程度であったと推定される。断面形はなだらかに傾斜した側壁を持ち、底は平坦に造られている。

覆土はかなり細く分れ、暗青灰色粘土層と、砂層を混えた暗青灰粘土層が交互に堆積しており、断続的ながら一時的にはある程度の流れを持った大溝であったことを窺わせている。

遺物はきわめて多く、当遺跡出土遺物の大半は当大溝内より出土した。

02大溝　01大溝を改修して造られた大溝。位置は01大溝と重複しているが、幅は広くやや浅い。幅は約10ｍで、深さ80cmの「Ｕ」字形の断面を持つ。側壁はなだらかで、平面形はやや不整形。

覆土は暗青灰粘土層を基調とするもので、２層に分割できるが、両者の差異は少ない。覆土には少量の木炭を含んでいたが、遺物の出土は少なかった。

なお、当大溝の覆土は、01大溝のごとく細分できなかったし、砂層の混入も認められなかった。

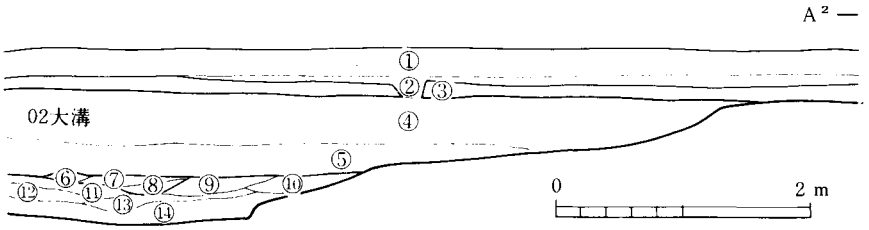
01溝　幅約0.5ｍ、現在長約9.0ｍ、深さ0.3ｍを測り、西端は02大溝と重複、東端は地山の傾斜部に当っており消滅している。側壁は直立に近く、底は若干丸味を持ったＵ字形の断面をなす。

覆土は暗褐色粘質土を基調とし、底に薄い数面の砂層が堆積し、その部分に有機質の植物遺体が遺存。遺物は土師器皿２ケ体分及び鉱滓が若干出土している。

02大溝より後出、05・10土坑上り先行する遺構と推定されるが、覆土が類似していたため結論は保留しておきたい。

掘立柱建物

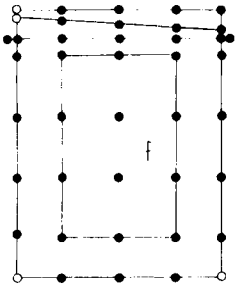
11棟を確認したが、その他にも建物の可能性の濃い柱穴群や、有機的に関連付けられなかった



⑧　暗青灰粘質土層（01大溝覆土、砂層との互層、木炭若干含む）
⑨　〃　（　〃　⑥層類似）
⑩　〃　（　〃　砂粒含まず、木炭・遺物希少）
⑪　黒青灰色粘質土層（　〃　木炭・遺物多量含む）
⑫　〃　（　〃　⑪層と類似）
⑬　〃　（　〃　砂粒希少、木炭・遺物多量含む）

柱穴も少なくなかった。

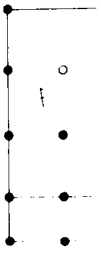
確認した建物には廂を持つ母屋様の建物（01～03建物）、2間×2間の倉庫様建物（04・05建物）、1間×1～4間の小規模建物（07～11建物）、06建物にみる総柱の小規模建物の4者が認められた。



01

01建物　南北5間（14.10m）×東西4間（10.40m）の四面に廂を持つ総柱の掘立柱建物。身舎の桁行柱間寸法は3.20m等間、梁行は3.00m等間。廂は南・東面が2.40m、西・北面が2.10mを測る。北側の廂は2度にわたり修築しており、廂の柱間寸法0.801mの柱列と、1.10m～1.70mの歪んだ柱間寸法の柱列とを確認している。両者の前後関係は不明。なお前者の柱列には西及び東側柱列の外側にさらにそれぞれ1本の柱穴を備えている。用途は明らかでないが類例を待って再考したい。柱穴は身舎部が径50cm前後、深さ50～60cm。廂部が径30cm前後、深さ20～30cmを測る。

この建物は当遺跡中もっとも大きな建物で、もっとも先行すると推定されるものである。桁行方位はN－5－Wを測り、当遺跡中には同方位の建物は確認できていない。



02

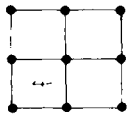
02建物　南北4間（11.70m）×東西1間以上（2.90m以上）の南に廂を持つ総柱の掘立柱建物。桁行寸法は、西側柱列南第1柱穴よりそれぞれ2.40m、2.90m、3.20m、3.20mを測る。桁行方位はN－9－Wで07・09建物及び柵の方位と一致する。

西側柱列南第1・第2柱穴の覆土が、他の柱穴覆土の暗褐色粘質土とは異なり淡褐色粘質土であったこと及び身舎の桁行柱間付法が不揃いである点など当該建物の復元には疑問点も残しているが、桁行方位の一致する建物が別に確認できたこと及び西側柱列の東に在る柱列北第1～第3柱穴に西側柱列と対応するものが認められたことを主要な根拠として復元を試みた。

03

03建物　柱穴３本を確認したのみであるが、柱穴形態、覆土の類似及び柱穴間隔より同一建物の柱穴と判断した。

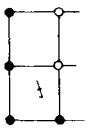
柱間寸法は南より2.40m、2.90mを測り、南に廂を備えた02建物類似の建物と推定しておきたい。桁行方位はN－１－Wを測る。



04

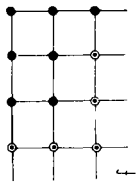
04建物　南北２間（5.80m）×東西２間（5.20m）の総柱、掘立柱建物。柱間寸法は桁行2.90m等間、梁行2.60m等間で設計されたと推定できるが、柱間寸法はやや不揃いで、特に柱筋は厳密には直行せず、かなりの歪みが認められる。桁行方位はN－17－Wを測り、06建物と同一である。

柱穴は径20cm、深さ10cm程度で、遺構面が著じるしく削去されたことを窺わせている。



05

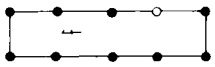
05建物　04建物と同形・同規模の建物と推定される。確認できた柱間寸法は東側柱列で2.90m、等間、北側柱列東第１、第２柱穴間で2.60mを測る。北側柱列（桁行）方位はN－10－Wで、当遺跡では他に例を見ない。柱穴は04建物同様小さく浅い。



06

06建物　東西３間以上（7.20m以上）×南北２間（4.60m以上）の総柱の掘立柱建物。柱間寸法は東北西側柱列で2.40m等間、東側柱列で2.30m等間。東側柱列の方位はN－17－Wを測り、04建物と同一である。また、この建物の南西部は01・02大溝と重複しており、その部分に当る柱穴中には柱根（径20cm前後の多角柱）を良く遺存していた。

当遺跡では、形態の点で他に例を見ない建物である。



07

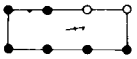
07建物　南北４間（10.40m）×東西１間（2.40m）の掘立柱建物。桁行の柱間寸法は一定ではなく、柱穴を完存している西側柱列で計測した場合、北第１柱穴の方向より2.40m、3.00m、2.40m、2.60mを測る。柱穴の形態・規模は、東側柱列は未発掘のため明らかでないが、西側柱列では径40cm前後、深さ30cm程度の比較的しっかりしたものであった。桁行方位はN－５－Wを測る。

なお、この建物は柱間距離3.00mを測った部分で、１間（2.40m）×１間（2.40m）と１間（2.40m）×２間（5.00m）の２棟の建物に分割できる可能性も残している。

08

08建物　南北３間（5.50m）×東西１間（2.10m）の掘立柱建物。柱列は西側柱列北第２柱穴がやや南に偏って在る他は良く揃っており、柱間寸法は桁行1.80～1.90mを測る。桁行の方位はN－９－W。柱穴は径

20～30cm、深さ20cm程度である。

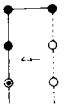


09

09建物　南北３間（6.40ｍ）×東西１間（2.70ｍ）の掘立柱建物。西側柱列北第１・第２柱穴を欠いているが、東側柱列（桁行）の柱間寸法が2.10ｍ等間に認められたので３間×１間の建物と推定した。桁行方位はＮ－５－Ｅ。柱穴は径20～30cm、深さ20cm程度である。

10

10建物　南北１間（3.00ｍ）×東西１間（2.70ｍ）の掘立柱建物。北東部の柱穴がやや西に偏よって在り歪んでいる。桁行方位はＮ－88－Ｗを測る。柱穴は07～09・11建物等同規模建物と比較して大きく、径30cm程度、深さ30cm前後を測る。なお南西部の柱穴内には柱根の一部を遺存していた。



11

11建物　東西２間以上（4.00ｍ以上）×南北１間以上（2.40ｍ以上）の掘立柱建物。東西柱列の柱間寸法は2.00前後と当遺跡建物群中もっとも狭い。南側柱列東第２・第３柱穴を確認していないが１間×２間以上の東西棟建物と推定しておきたい。東側柱列の方位はＮ－10－Ｗを測る。北側柱列東第３柱穴の柱根（径20cm）が01土坑中に遺存していた。

柵

柵

07建物の西側柱列に同一方位で重複して在る柵１基を認めた。柱穴は６本確認しており、柱間寸法は南側より2.70ｍ、2.50ｍ、2.50ｍ、2.70ｍ、2.50ｍで、方位はＮ－10－Ｗを測る。柱穴は比較的大きく、径30～40cm、深さ30cm前後を測る。

なお、同柵については、南より第１及び第４柱穴の東2.40ｍには対をなすかのような柱穴が認められ、07建物同様の１間×数間の建物であった可能性も考えられるが、他には対応する柱穴を確認できなかったので柵と推定した。

土　坑

土坑は総数で19基を数えた。その中１基は遺構範囲確認のための南北トレンチで確認したもので、発掘していないので以下では省略した。

調査した18基の土坑は形態上かなりのバラエティを持っていた。分類すれば①中規模の整備な箱形の土坑（01土坑）。②比較的大型の略円形土坑（02・16・18土坑）。③比較的大型で略長方形、皿状の坑底を持つ土坑（04・17土坑）。 ④小型の略方形の不定形な土坑（03・05～15土坑）に分類できよう。

なおこの内④として分類した一群は、形態にバラツキが有るのみでなく、覆土あるいは出土品

等にも差がある。形態上細分の必要があるとともに用途面でも一括できないようである。

01土坑　東西長0.76m、南北幅0.68m、深さ0.50m。側壁が直立し、底の平坦な整美な造作の長方形箱形土坑。坑内より木椀２、土師器皿２、細片となった白磁１個体分、箸状木器３個体分、鉱滓及び火を受けた砂岩塊が出土している。出土遺物が多く、また種類が豊富な点及び土坑の形態の点で他の土坑とは大きく異っている。性格不明。

なお、この土坑は02大溝に後出し、11建物に先行する遺構である。覆土は暗青灰粘土。

02土坑　東西幅約２m、深さ30cm前後の浅い皿状の土坑。南半部未発掘。覆土は暗青灰粘土層で若干の木炭を含み、坑内からは土師器片及び若干の鉱滓が出土している。02大溝との先後関係は不明。

03土坑　一辺約0.60m、深さ0.25mを測る土坑。02大溝と重複しているため平面形不明。覆土は暗青灰粘土層で白磁椀破片出土。02大溝との前後関係不明。

04土坑　幅1.0m、長さ2.40m以上、深さ0.20mを測る浅い不定形土坑。底は皿状をなす。覆土は暗青灰粘土層で、多量の木炭を含む。北辺に火を受けた人頭大の石塊３点出土。

05土坑　東西幅0.60m、南北幅0.50m、深さ0.20mを測る。略方形の皿状の坑底を持った不定形な土坑。覆土は淡青灰粘土層。01溝との前後関係不明。

06土坑　07土坑と重複。南辺の側壁は不明瞭であったが、東西0.80m、南北0.50m、深さ0.10mの略方形の不定形土坑。覆土は淡青灰粘質土層で、若干の木炭を含む。

07土坑　現存部の南北最大幅0.50m、東北幅0.30m、深さ0.05m内外の浅い不定形土坑。覆土は淡青灰粘質土層。

08土坑　南北幅0.55m、東西幅0.48m、深さ0.25mを測る。略方形の皿状の坑底を持った不定形土坑。覆土は淡青灰粘土層。

09土坑　南北幅0.65m、東西幅1.0m、深さ0.26mを測る不定形な土坑。坑底は皿状をなす。覆土は暗灰色粘質土層で、木炭及び土師器小破片若干出土。10土坑より後出の土坑と推定された。

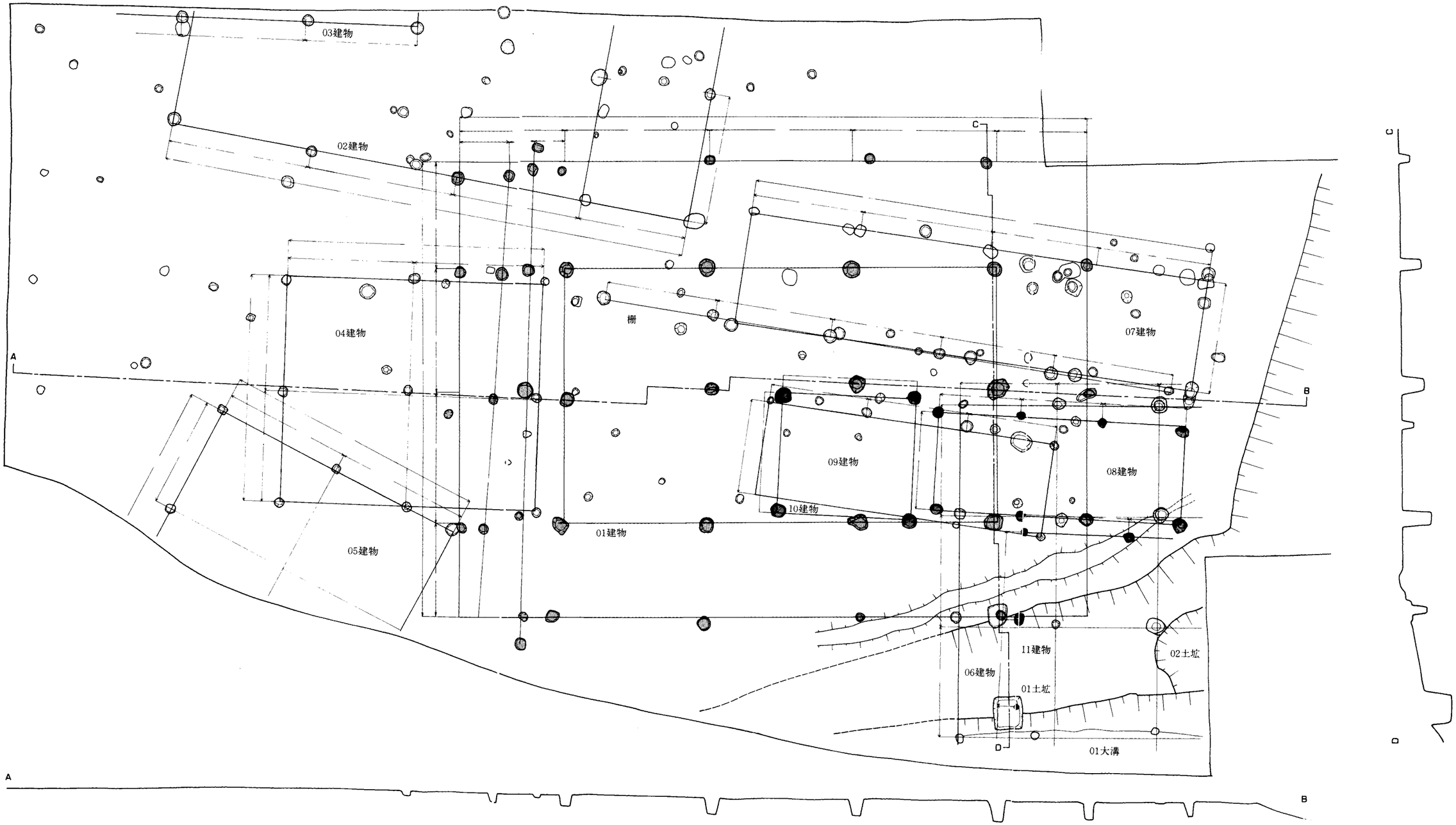
10土坑　東西0.40m、南北1.35m、深さ0.17mを測る。細長い不定形土坑、坑底は皿状をなす。覆土は淡褐色粘質土層で木炭を比較的多量に含む。

11土坑　0.50×0.50m、深さ0.18mを測る略方形の不定形な土坑。坑底は東辺がもっとも深く、不整形。坑内より拳大の割石出土。覆土は淡青灰粘質土層。

12土坑　0.70m×0.70m、深さ0.25mを測る略円形の不定形な土坑。坑底は比較的平坦で、側壁はおおむね直立している。覆土は暗青灰粘質土層で、多量の木炭を含んでいた。また、坑内より５～６個の拳大の割石の他、鉱滓１点を出土した。

13土坑　14・15土坑と重複、0.55m×0.70m、深さ0.34cmを測る略円形の不定形な土坑。坑底は皿状をなし、西北辺の側壁は袋状をなす。覆土は暗青灰粘土層。

14土坑　0.80m×0.50m、深さ0.12mの不定形な皿状の土坑。坑底は凹凸が甚しい。覆土は暗


03建物
02建物
04建物
柵
07建物
09建物
08建物
10建物
01建物
05建物
11建物
06建物
01土坑
02土坑
01大溝
A
B
C
D

第5図　建物群実測図

16土坑
01溝
02大溝
03土坑
04土坑
05土坑
06土坑
07土坑
08土坑
09土坑
10土坑
11土坑
12土坑
13土坑
14土坑
15土坑
不定形遺構群
0
15m
A
B
C
D
E
F

第6図　土坑等実測図

青灰色粘質土。

15土坑　0.40m×0.50m、深さ0.21mを測る不定形な皿状の土坑。覆土は暗青灰色粘質土層。

16土坑　東西幅2.40m、南北の確認幅1.10m、深さ0.25mを測る。坑底が皿状をなす造作の比較的しっかりした円形の土坑。覆土は暗青灰粘質土層で、木炭を含む。坑内より土師器片及び須恵器の口縁部破片出土。

17土坑　長さ2.00m以上、幅1.00m、深さ0.30cmを測る。形態は03土坑に類似しており、略方形で皿状の坑底を持つ。覆土は黒褐色粘質土で多量の木炭を含む他、坑内より土師器破片及び多量の鉱滓出土。18土坑との先後関係は不明。

18土坑　略円形の皿状の坑底をもった土坑であったと推定される。現存する南北幅2.10m、東西幅1.20m、深さ0.50mを測る。覆土は黒褐色粘質土層で多量の木炭を含む他、17土坑同様土師器片及び鉱滓出土。不定形遺構より先行する。

不定形遺構

東西確認幅4.50m、南北幅約2.00m、深さ0.8mを測る略方形の竪穴状掘り込みの北西コーナ部に長さ1.80m、幅約0.30mの溝を付設した特殊な形態の遺構。

溝と方形竪穴状遺構の関連については、調査時には湧水のため充分確認できなかったが、溝が丁度方形竪穴状遺構の西北コーナ部に存ること及び、溝と方形竪穴状遺構の接続部の両者の底のレベルが一致することを根拠に一体の遺構と判断した。

方形竪穴状部分は、特に西辺部では明瞭に段に掘り込んでいる。第1段目の深さは約0.2m、2段目は0.30mを測る。2段目の方形部分の平面寸法は東西3.0m以上、南北1.30m以上を測る。

覆土は暗青灰粘質土層で有機物の混りは少ない。遺構内より下駄1点、土師器皿の略完形品1点他若干の細破片及び小量の鉱滓出土。

建物群の構造と変遷　建物群および建物群に直接関連する遺構には、建物11棟、柵1基、大溝2条がある。今これらを建物の軸線方位、01・02大溝の共併関係により分割すれば次の5群に分れよう。

1群　01建物と01大溝

2群　02建物・07建物・09建物・柵と02大溝

3群　03建物・04建物・06建物

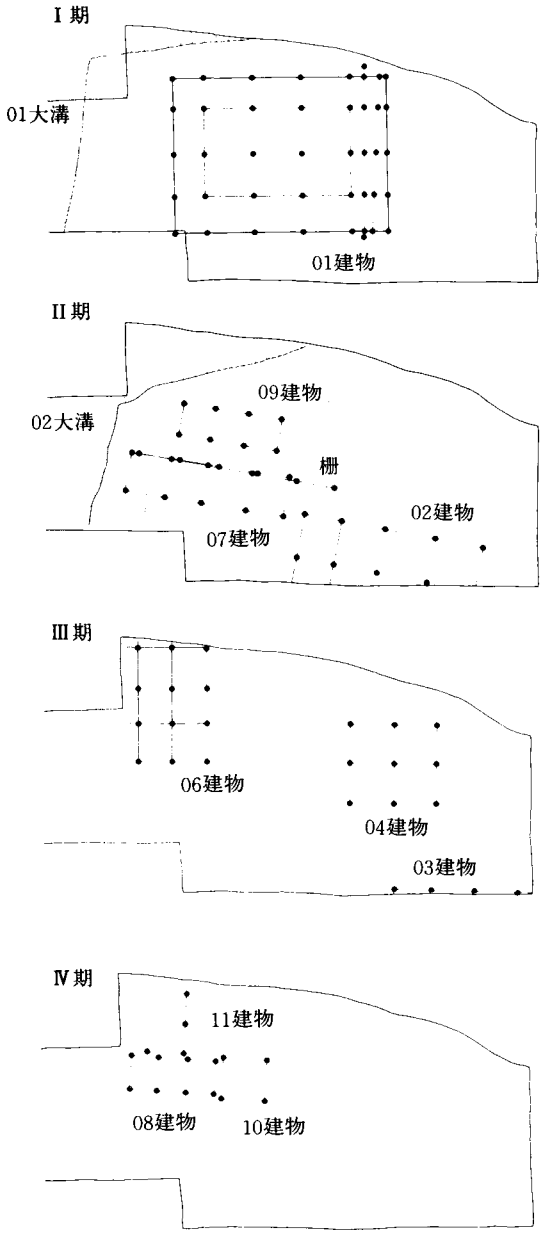
4群　08建物・10建物・11建物

5群　05建物

各群の築造順序については、01大溝と01建物からなる第1群がもっとも旧く、次に01大溝を改修した02大溝をともなう第2群が続くと考えられる。第3群と第4群は02大溝廃絶後の建物群で、ともに第2群より後出のものといえる。そのことは02大溝廃絶後掘られた01土坑を切って築造された11建物が第4群にともなうことと矛盾しない。ただ、両者の新旧については決め手を欠いて

おり結論を保留せざるを得ないが、第４群建物築造時と、02大溝廃絶との間に01土坑築造の時間帯を見なければならない点と、第３群建物群の母屋の位置が、第２群建物群のそれと類似の位置に在ることより第３群から第４群へと変化したと推定しておきたい。なお、実態のほとんど明らかでない第５群に関してはその所属を保留しておきたい。以上より建物群の変遷は第１群→第２群→（第３群→第４群）として整理できる。

建物群の構成については、調査範囲に制約があり、各時期とも全体の構成を知るまでには至っていない。検出された11棟の建物を構造別にみると、母屋と推定される廂を備えた建物（01～03建物）、２間×２間の倉庫様の建物（04・05建物）、１間×１～４間の細長い小建物（08～11建物）の３者に区分できる。03建物については母屋とするには他の母屋と比較して柱間寸法が狭く、また全体の規模・構造が分らないので帰属を保留せざるを得ない。各時期の建物群の構成に関しては、機能的に分割できるこれら三者からなったであろうことは容易に予測できるが、その具体像の検討は今後の調査に委ねたい。



第７図　建物群変遷模式図

4. 遺　　物

出土遺物の種類　本遺跡では平安時代末期の遺物が主体をなすが、その他古墳時代、平安時代中・後期、中世および近世の遺物が出土している。時期別に分類し、その種類を上れば次のように整理できよう。

〈古墳時代〉　4世紀代のものと6世紀後半代のものが認められ、総て01・02大溝内より平安時代末期の遺物と混在して出土した。4世紀代のものは土師器片若干（高杯脚部・甕破片等）、6世紀代のものでは須恵器破片若干（杯蓋等）がある。

〈平安時代中・後期〉　古墳時代の遺物と同様01・02大溝より出土。須恵器坏身・瓶・双耳瓶・甕破片等が有る。所属時期は細破片が多く充分観察できなかったが、中・後期に属するものと判断された。

〈平安時代末期〉　当該遺跡の中核をなす遺物で、多種・多様の遺物が出土している。遺物は主として01大溝より出土しているが、その他、02大溝、01土壙を始めとする土壙、および建物群柱穴内より検出された。種類には次のものが含まれる。土製品（土師器・須恵器・磁器・フイゴ羽口）木製品（供膳具・服飾品・編具・用途不明木器・部材等）金属製品（貨幣・鉱滓）自然遺物（種子・獣歯）その他の遺物（藁製品等）

〈中世〉　主として包含層・耕土中よりの出土品で占められるが、02大溝覆土中からも若干の遺物が出土している。中世陶器（珠洲焼・加賀古陶等）磁器等が有る。

〈近　世〉　主として耕土中より出土したもので陶磁器類、貨幣（寛永通宝）が有る。

〈時期不詳の遺物〉　時期不詳の遺物として純銀製の延板状の製品および土錘・支脚形土製品が有る、前者は近世、後二者は平安時代末期から中世にかけの遺物であろうと推定している。

01大溝出土遺物　01大溝は01建物にともなう最古の遺構で、02大溝により溝底部を残しそのほとんどは削平されていた。当遺跡出土遺物の大半は、わずかに残ったこの溝底より出土したものである。出土状態については、湧水が著じるしく充分観察できなかったが、良好な一括遺物と推定されるものであった。

01大溝の廃絶については、01建物の柱穴内より多量の木炭と火を受けた須恵器・土師器が出土している点と、01大溝出土品が、同様に火を受けた須恵器・土師器・木器を含み、しかも一括して廃棄されたような状態で出土していることから、01建物の火災が直接の契機ではなかったかと推定される。01大溝出土品がきわめて一括性の高い遺物と判断したのは、その廃絶が以上のようなものであったと推定されたことを主要な根拠とするが、その他、廃絶後の自然堆積部分が、02大溝築成の折、削り取られており、自然堆積時の遺物混入を配慮しなくとも良いという優れて恵

まれた条件も手伝っている。

01大溝出土品については、以下項をおって個々に触れていくが、主体をなす平安時代末期の遺物の他、先行する遺物も若干含まれていた。しかし、火を受けた遺物は平安時代末期のものに限られる。しかも火を受けた時が、先に推定したごとく01建物、01大溝廃絶時に限定できるならば、火を受けた遺物を追跡することにより、一括性の時間帯をさらに絞ることができよう。この点は、以下では時期判断の困難な須恵器甕破片を先行する遺物群から分離する際の主要な視点とした。

なお、以下で第２調査区出土品としたものは、01大溝延長部分に設けた試掘孔出土品で、01大溝延長部分の出土品を主体とするが、02大溝および包含層、耕土の出土品も含まれている、補足資料に留めざるを得ない。

１）土製品　土製品には土師器、須恵器、磁器、中・近世陶磁器、支脚形土製品、土錘、フイゴ羽口がある。以下平安時代末期の遺物を中心に紹介しておく。

土師器（第８・９図　図版10・11）　土師器には小皿・皿・椀・堝形土器がある。そのほとんどは01大溝より出土したもので、その他、01土壙および不定形遺構のものが若干含まれる。なお、包含層からの出土品はきわめて少なかったので、以下の紹介は遺構出土品に限った。

小皿（第８図１～17）　総数60個体を数え、もっとも類例が多い。内面黒色土器は１例のみである。形態上変化に富み９類に分割できる。

Ａ類　４個体（１～４）。その他底部のみであるが、その特色が本類及びＢ・Ｃ類と共通したもの22個体が認められる。(1)と(2)～(4)とは形態上かなりの差異点を持つが、ここでは一群として扱った。椀形に近い体部を持ち、口唇部が肥厚する。口辺部内外面および底部内面はヨコナデ調整。底部は厚く、切り離しのままで明瞭な糸切り痕を残す。胎土は砂粒を含み若干粗い。焼成良好。色調は赤褐色までのものを含む。

Ｂ類　２個体（５・６）形態・手法はＡ類に準ずるが、底部が若干薄い点と、口辺部・底部内面を丁寧なヨコナデにより平滑に調整している点で異る。(6)は体部内面に油煙付着。胎土は砂粒を含み若干粗い。焼成は良好。色調は淡褐色。

第１表　土師器個体数および法量一覧

分類	個体数	底部による推定数	内面黒色土器数	口径 cm	器高 cm	底径（高台径） cm
小　皿（60個体、内黒色土器　１点）						
小皿A	4	22	1	8.3～9.2	2.0～3.6	3.5～4.3
〃　B	2			8.6～9.3	2.3～2.4	4.1～4.3
〃　C	2			9.0	1.8～2.2	4.9～5.4
〃　D	2	17	—	9.0～9.7	2.4～2.7	4.1～4.3
〃　E	1		—	10.2	2.3	5.2
〃　F	2		—	7.4～7.6	1.7～1.8	3.8～4.8
〃　G	2		—	10.0	1.9～2.1	5.1
〃　H	1		—	10.1	2.2	4.4
〃　I	1	—	—	9.2	2.0	6.6
〃　J	1	3	—	7.5	3.3	3.5
無高台椀（31個体、内黒色土器　６点）						
無高台椀A	3	21	5	13.2～14.8	4.4～4.9	6.1～6.4
〃　B	2			14.3～14.4	4.3	6.1
〃　C	1	—	1	13.8	(4.1)	—
〃　D	1	—	—	14.2	3.5	—
〃　E	1	2	—	15.0	3.7	—
皿　（５個体）						
皿　A	2	—	—	13.8	4.3	6.3
〃　B	1	—	—	17.2	4.4	6.7
〃　C	2	—	—	—	—	7.5～7.4
高台椀（27個体、内黒色土器　19点）						
高台椀A	2	6	8	14.6～14.8	5.9～6.4	6.5～6.2
〃　B	1	—	1	14.0	5.0	7.0
〃　C	1	—	1	—	—	7.5
〃　D	1	—	—	—	—	7.4
〃　E	2	—	1	14.3～15.8	(4.3)	7.0
〃　F	1	—	—	14.3	(5.0)	6.7
〃　G	—	5	5	—	—	6.6～7.3
〃　H	—	3	2	—	—	5.8～6.3
〃　I	—	4	—	—	—	4.5～5.5
〃　J	—	1	1	—	—	6.5
小　埦	1	—	—	4.5	2.2	3.3

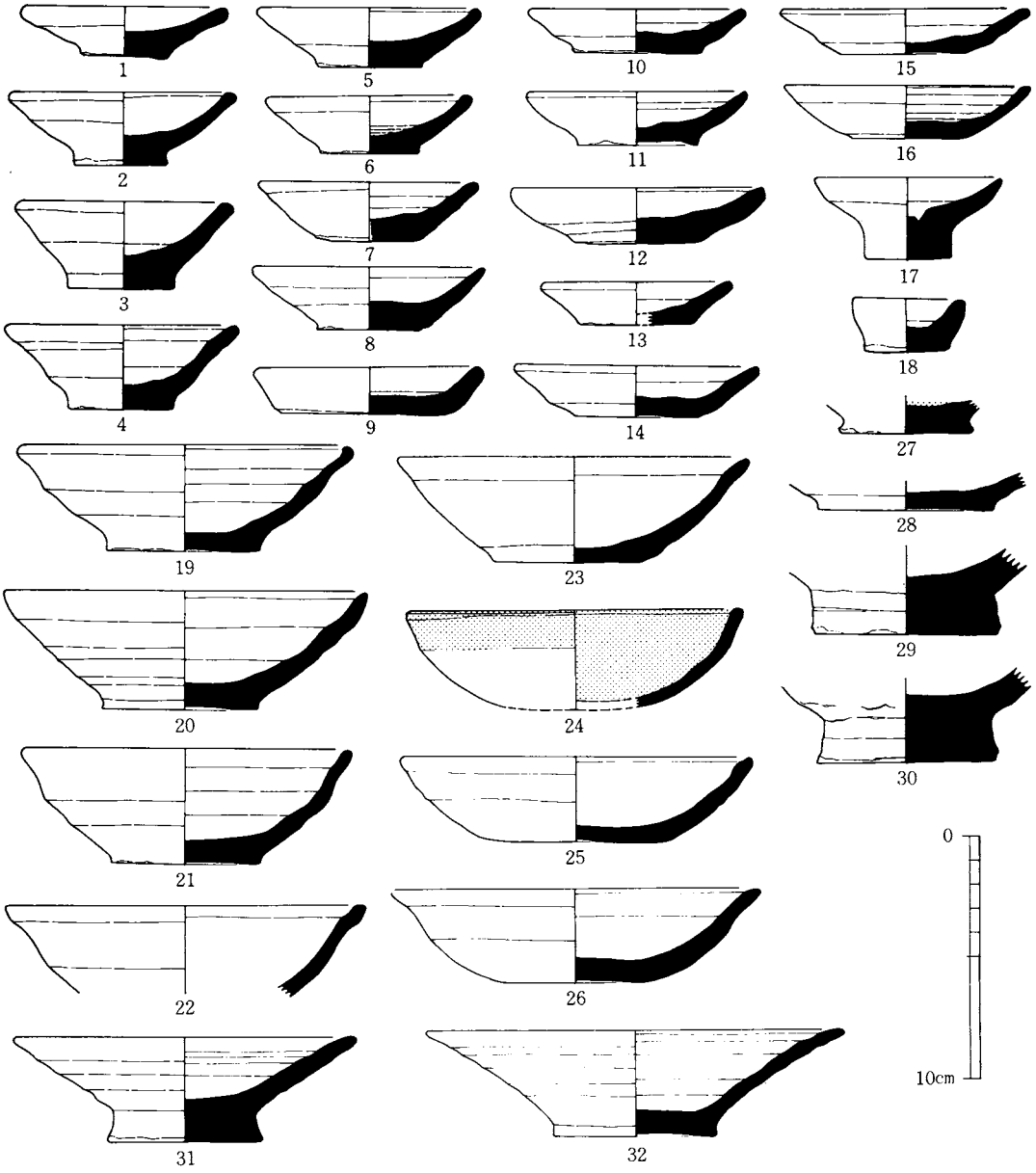
Ｃ類　２個体（10・11）　内湾気味に開く体部を持ち、口唇部を丸く納めたもの(10)と尖り気味のもの(11)とがある。口辺部はヨコナデ調整、底部内面は指ナデ。底部はＡ類ほど極端ではないが、高台様をなす。切り離しのままで造作は粗く、明瞭な糸切り痕を残す。胎土は比較的大きな砂粒を含むが良好。焼成良好、色調は(10)が暗淡褐色、(11)が明黄褐色。

Ｄ類　２個体（７・８）　外方に開く体部を持ち、口唇部は尖り気味となる。口辺部内外面、底部内面はヨコナデ調整。底部は厚いがＡ～Ｃ類のごとく下方へ突き出さない。糸切り痕を明瞭に残す。胎土は砂粒を含み粗い。焼成良好、色調は淡褐色。なお、本類およびＥ～Ｈ類に属すると推定される底部破片17個体が認められる。

Ｅ類　１個体(12)内湾気味に開く体部を持ち、口唇部はヨコナデによる面を持ち、先端は尖っている。口辺部はヨコナデ調整を施しているが粗く、外面には粘土紐巻き上げの痕跡を留めている。底部は切り離しのままで、明瞭な糸切り痕を残す。胎土は砂粒を含み粗い。焼成堅緻。色調は淡黄褐色。

Ｆ類　２個体(13)　外方にほぼ直線的に開く短い体部を持つ。口唇部は丸く納めるか、ヨコナデによる弱い面を持つ。体部はヨコナデ調整、底部は切り離しのままであるが造作は丁寧。(13)の体部内面および外面の一部に油煙付着。胎土・焼成良好、色調は淡褐色。

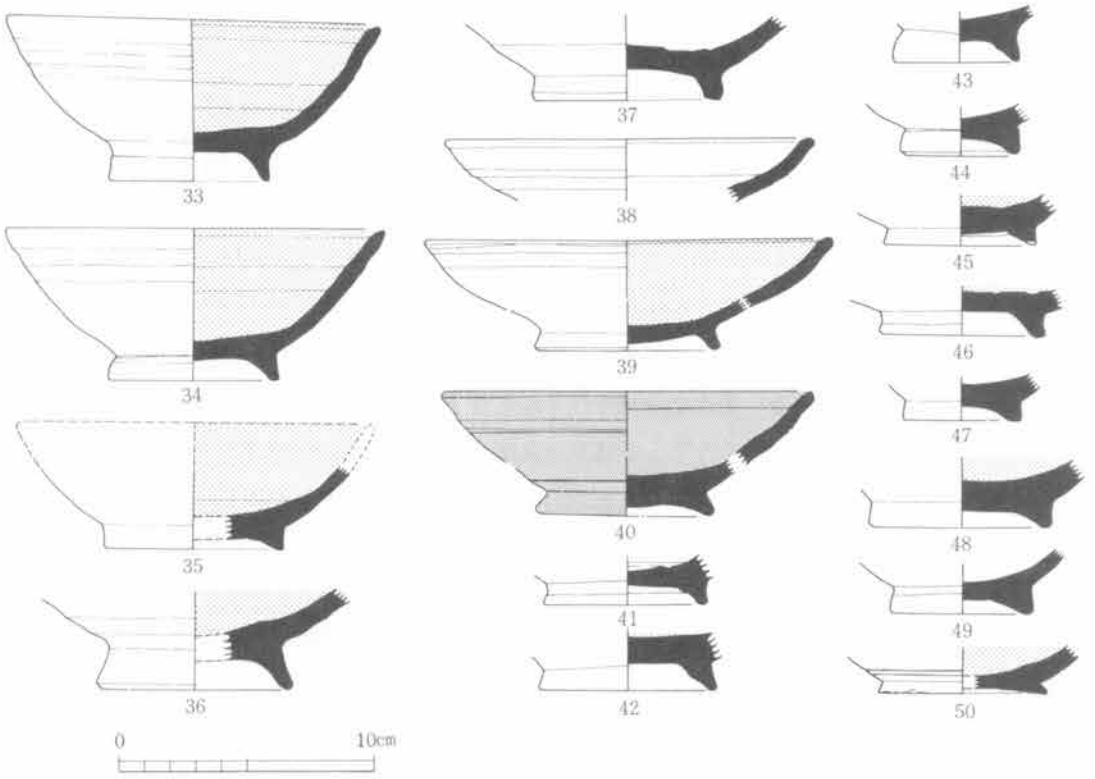
Ｇ類　２個体(14・15)　口辺部内面に稜を持ち、口唇部外面を面トリしている。磁器小皿との



第８図　土師器実測図

類似を想わせる。口辺部内外面はヨコナデ調整で、底部内面中央に限り指ナデ。底部は高台状をなさず、若干へこみ気味。糸切痕を残す。胎土は砂粒を含み粗い、焼成良好。色調は淡褐色および褐色。

Ｈ類　１個体⑯　比較的入念な調整を施した精製品、器肉の一定した内湾気味の体部を持ち、口唇部はヨコナデにより平坦に仕上げている。内面ヨコナデ、口辺部外面は上半部ヨコナデ、下半は粘土がやや乾いた時点でヨコナデ調整したためか、ヘラ削りに近似したナデ痕を残す。底部



第９図　土師器実測図

は切り離しのままで糸切り痕を残す。胎土は若干砂粒を含むが良好。焼成良好、色調暗淡褐色。

Ｉ類　１個体(9)　浅い皿形。器肉は厚く、口唇部を丸く納めている。口辺部はヨコナデ調整。内面底部は指ナデ。底部は切り離しのままで、明瞭な糸切り痕を残す。胎土は精選されており砂粒少なく良好、焼成やや不良、色調淡黄褐色。

Ｊ類　４個体(17)　高台様の高い底部と、口径の小さな体部を持つ。口辺部は尖り気味で、底部内面中央にはヨコナデ調整でできた円形のへこみが認められる、体部は内外面ともヨコナデ調整。底部に糸切り痕を認める。胎土は砂粒をほとんど含まず良好。焼成良好、色調は燈褐色から淡褐色のものを含む。

無高台椀（第８図19～28）　総数31個体を数える。内面黒色土器は少なく６個体を確認したに留る。５類に分類してみた。

Ａ類　３個体（19～21）の他、Ａ・Ｂ類のいずれかに該当すると推定される底部破片21個体(27・28を含む）がある。内湾気味の体部と、口径に比較してやや少さい底部を持つ。体部はヨコナデ調整を施しているが、器肉の凹凸が甚しい。(19)は口唇部が肥厚し内側に折れ曲っている。底部は切り離しのままで明瞭な糸切り痕を残す。(19)の内面および外面の一部に油煙付着。胎土は砂粒を含み若干粗いもの(20・21)と、砂粒を含むがおおむね良好なもの(19)とがある。焼成良好。色調

は⑲が暗赤褐色、(20・21)が淡褐色。

B類　2個体(22・23)　形態・手法はA類に準ずるが、体内面を丁寧なヨコナデ調整と、底部中央の指ナデにより平滑に仕上げているものをB類とした。胎土は砂粒をほとんど含んでおらず良好、焼成はやや脆く、色調は淡黄褐色。

C類　1個体㉔　器肉の一定した内湾気味の体部に、丸底風の底部を持つと推定される。口唇部はヘラ等の調整用具により、幅のせまいシャープな削り様の面とりを重ね、丸く仕上げている。口辺部外面上半部はヨコナデ、下半は指ナデ調整。内面は上半は横方向、下半は斜方向のヘラミガキ調整。内面黒色土器で、外面上半部も黒色化している。底部は指ナデ調整で、糸切り手法はとっていないと推定される。胎土は砂粒をほとんど含ず良好、焼成良好、色調は淡黄褐色。

D類　1個体㉕　浅い椀形をなし、丸底風の底部を持つ。口辺部内外面とも上半部はヨコナデ、下半は粗い削りと指ナデ調整を併用。底部内外面の調整は口辺部下半の調整に準ずる。胎土は砂粒の混入が希で良好、焼成良好、色調淡黄褐色。

E類　3個体㉖　形態はD類に近いが調整が粗く、胎土も悪い。上半部で外反する口辺部と、粗い調整により丸く仕上げた底部を持つ。口辺部外面はヨコナデ調整、内面および底部内面は、カキメ様の調整痕を残したヨコナデ。底部は切り離しのままで糸切り痕を残す。器壁外面および内面の一部に煤付着。胎土は砂粒を含み粗い。焼成堅緻。色調暗赤褐色。

皿（第8図31・32）　5個体ある。厚い高台様の底部を持つもの2個体㉛と、そうでないもの1個体㉜とのA・B2類に分類できる。両者とも口辺部は内外面ともヨコナデ調整、底部は切り離しのままで、糸切り痕を残す。胎土はともに砂粒を含むが良好。焼成良好、色調は淡褐色。

なお第8図29・30の底部は、体部の形態が明らかではないが、皿形に近いと推定されるものである。2個体あり仮に皿C類としておきたい。底部に糸切り痕を残す。胎土は砂粒を含み粗い。焼成は良好、色調は淡褐色。

高台付椀（第9図33～50）　27個体。総て01大溝内より出土、全体の形態の分るものは少ないが、高台をともなうものは、おおむね椀形に限られるようである。以下、主として高台部分の特色より10類に分類してみた。黒色土器は19個体含まれており、他の器種に比較してその頻度は高い。

A類　8個体（1・2・14）。総て内面黒色土器。体部下半のはりの弱い深い椀形をなし、口唇部内側はヨコナデにより面とり。口辺部外面はヨコナデ調整。内面はヨコナデ調整の後、粗いヘラミガキを加えている。ヘラミガキは上方では横方向、下半は横方向と斜方向の併用、底部内面はその周縁に沿った弧状のものと粗い井枠状の方向のものとを併用している。高台はほぼ下方に突き出した比較的高いもので、外面は丁寧なヨコナデ調整、内面は高台部の他、底部の周縁もヨコナデ調整を加えている。ヨコナデの及んでいない底部中央に糸切り痕を認める。胎土は砂粒を含むが良好、焼成も良好で色調は燈褐色。

B類　1個体(35)　丁寧な調整を施した精製品。内面黒色土器、口辺部上半の形態は分らないが、第9図35に復元したような椀形と推定され、漆器椀との類似を連想させる。体部は外面を丁寧なヘラ削り、内面はヘラミガキを施し、器肉を一定に仕上げている。ヘラミガキは体部下半では幅の狭い工具による横方向、底部は幅の広い工具により指ナデ状に施している。高台は先端の尖ったシャープな造作のもので、内外面とも丁寧なヨコナデ調整。底部中央に糸切り痕を認める。胎土は精選された良好なもので、焼成は堅緻。色調は淡褐色。

C類　1個体(36)　外方にはりだした高い高台を持つ大型品で、体部は浅い椀形をなすと推定される。内面黒色土器。体部内外面、底部内外面ともヨコナデ調整、胎土は若干砂粒を含むが良好、焼成堅緻、色調淡褐色。

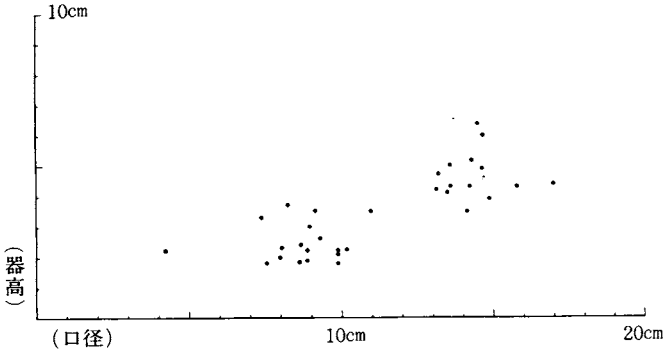
D類　1個体(37)　浅い椀形の体部にいびつな造作の高台を持つ。体部は内外面ともヨコナデ調整を施しており、内面にはラセン状のヨコナデ痕を残す。高台は先端を丸く造った造作の粗いもので、特に内面は充分なナデ調整を施していないため、貼付の痕跡を明瞭に残している。底部は糸切りによる切り離しのままで、ナデ調整を施していないようである。その周縁部に下駄の歯跡に似た押印（状）が認められる。胎土精選されているが、焼成は不良で脆い。色調は淡黄褐色。

E類　2個体(38・39)　浅い椀形の体部に外方にはり出した器肉の薄い高台を持つ。(39)は内面黒色土器。椀部の調整は無高台椀C類と同一。底部は先端部を丸く納めた丁寧な造りのもので、内外面をナデ調整している。底部は器壁の残りが悪く充分観察できないが、糸切りの痕跡は認められず、指ナデ調整を施したものと推定される。胎土は精選され良好、焼成良好、色調は淡褐色。

F類　1個体(40)　浅い椀形の体部に外方にはりだした高台を持つ。口唇部は面とりして平坦に仕上げており、口辺部中央に1条の沈線をめくらす。内外面とキヨコナデ調整を施し、赤色顔料を塗彩した痕跡を残す。高台は外方にはりだし、内外面、端面とも丁寧なヨコナデ調整を施している。底部中央に糸切り痕を残す。胎土は細砂粒を若干含むが良好で、焼成は堅緻。色調は赤褐色。

G類　5個体(42・48)　高台のみで全体の形態は不明。高台部の特色はF類に類似するが、本類に含めたものは総て内面黒色土器である点と、口辺部の破片中にF類に該当すると思われる特徴的なものがきわめて少ないことから分割した。体部はA・B類に近い椀形をなすと推定されるが不明。体部下半の外面はヨコナデ、内面はヘラミガキを施しているが、ヨコナデ調整によるラセン状のナデ痕を残しているものも少なくない。胎土は砂粒を若干含むが良好。焼成は堅緻で色調は淡褐色。

H類　3個体(41・45写真図版12～)　内面黒色土器2個体。体の形態は不明。高台の造作は粗く、貼り付け部の痕跡を残し、先端は指あるいは板目状の圧痕により凹凸している。底部中央に糸切り痕を認める。体部内面にはラセン状のヨコナデ調整痕を残す。胎土は砂粒を含むが良好。焼成は堅緻で色調は燈褐色。



第10図　01大溝出土土師器の法量分布

Ⅰ類　4個体(43・44・47)　高台のごく小さいものを一括に扱った。体部は明らかでない。(43・44)の体部下半は内外面とも横ナデ調整。(47)は外面ヘラ削り、内面は底部を除きヘラミガキを施している。底部内面には(43・44)同様ラセン状のヨコナデデ調整痕を残す。高台はヨコナデ調整を施しているが、特に内面は不徹底で、貼り付けの痕跡を残す。底部中央に糸切り痕を残す。胎土は砂粒を含み若干粗い。焼成堅緻で色調は燈褐色。

Ｊ類　1個体(50)　内面黒色土器。ベタ高台を持つ。体部外面はヘラ削りを施し、高台に近い部分に不規則な2条の条線を持つ。内面はヘラヌガキ。底部は削りヘラ削りを施しており、糸切り痕の有無不明。胎土は砂粒を含み若干粗い。焼成堅緻、色調暗淡褐色。

小堝（第8図18）　1個体、厚い底部とほぼ直角に立ち上る口辺部を持ち、口唇部は丸く納めている。体部は内外面ヨコナデ調整。底部は糸切り、胎土は砂粒を含み若干粗い、焼成良好、色調は暗淡褐色。

須恵器（第11・12図　図版12・13）　甕破片約100片の他、杯身・瓶等の細破片若干が出土している。ここでは甕破片を中心に紹介しておきたい。

Ａ類　外面格子目叩きのものをＡ類とした。内面調整はナデ調整のもの、削りとナデ調整を併用したもの、「鳥足」状ないし「菊花」状の叩きをもっもの、および弧形と平行叩きを組み合わせたような特異な叩きをもつものとの4種5タイプが認められる。

ＡⅠ類　（1・7）の他、破片若干が認められる。格子目が長方形（0.7×0.4cm　1単位以下同様）で、重ねて叩いている部分は平行叩きに類似している。叩き目の方向は右上り。内面は粗いナデ調整のみを認めるが、先行して叩き調整を加えている可能性が濃い。胎土には小砂粒（石英）若干を含むが、灰白色を呈したガラス質に近い印象を与えるもので良好。焼成良好。火を受け器面に煤付着。(1)は01建物柱穴内、(7)は01大溝より出土。

ＡⅡ類(12)　ＡⅠとほぼ同様の格子目叩きをもつ。叩きの方向は右上り。内面は削りによる調整。胎土はＡⅠ類に比較して粗く、焼成も脆い。色調は淡黄褐色。01大溝出土。

ＡⅢ類(18)　ＡⅠ類とほぼ同様の格子目叩きをもつ。口辺部の器形が分る唯一の例で、叩きはほぼ水平に施されている。内面は「鳥足」状ないし「菊花」状の叩きを持つ。胎土は少破粒を含みやや粗い。焼成良好。色調暗青灰色。器面に煤付着。16土壙出土。

ＡⅣ類　（2・3）の他、破片若干が認められる。方形に近い格子目（0.6cm×0.4cm）叩き。叩きの方向は不明。内面は削りとナデを併用した粗い調整。胎土は灰白色を呈するが、砂粒を含

むとともに、気孔が目立ち粗い。焼成は脆い。色調はいぶし焼様の暗灰色（器表面）。火を受け器面に煤付着。C地点および01大溝出土。

A V類　⒄の他、破片若干がある。方形の小さな格子目（0.4cm×0.3cm）叩き。叩きの方向不明。内面は同心円叩き目が変形したごとき叩き目を持つ。同心円叩きと平行叩きを併用した可能性も残す。胎土・焼成・色調は通常の須恵器と変らない。胎土は砂粒を若干含むが良好。焼成堅緻。色調暗青灰色。火を受け器面および割れ面に煤付着。包含層より出土。

B類　外面に平行叩き目を持つものをB類とした。主として内面調整により7類に分類した。出土量はA類よりはるかに多い。

B I類　（4・6）の他、破片が若干出土している。右上りの比較的幅の広い平行叩き（0.5cm、条線1本の間隔以下同様）をもつ。内面は粗い削りとナデ調整を併用。破片中に円心円叩きの痕跡と推定される叩き痕を残すものが認められるが、器壁の剥離が著じるしく詳細は不明。大型の甕破片と推定され、器肉は厚い。胎土は多量の砂粒（石英）を含み粗い。焼成良好。色調暗灰色。火を受け器壁の剥落したものが少なくない。⑷は01大溝、⑹はC地点出土。

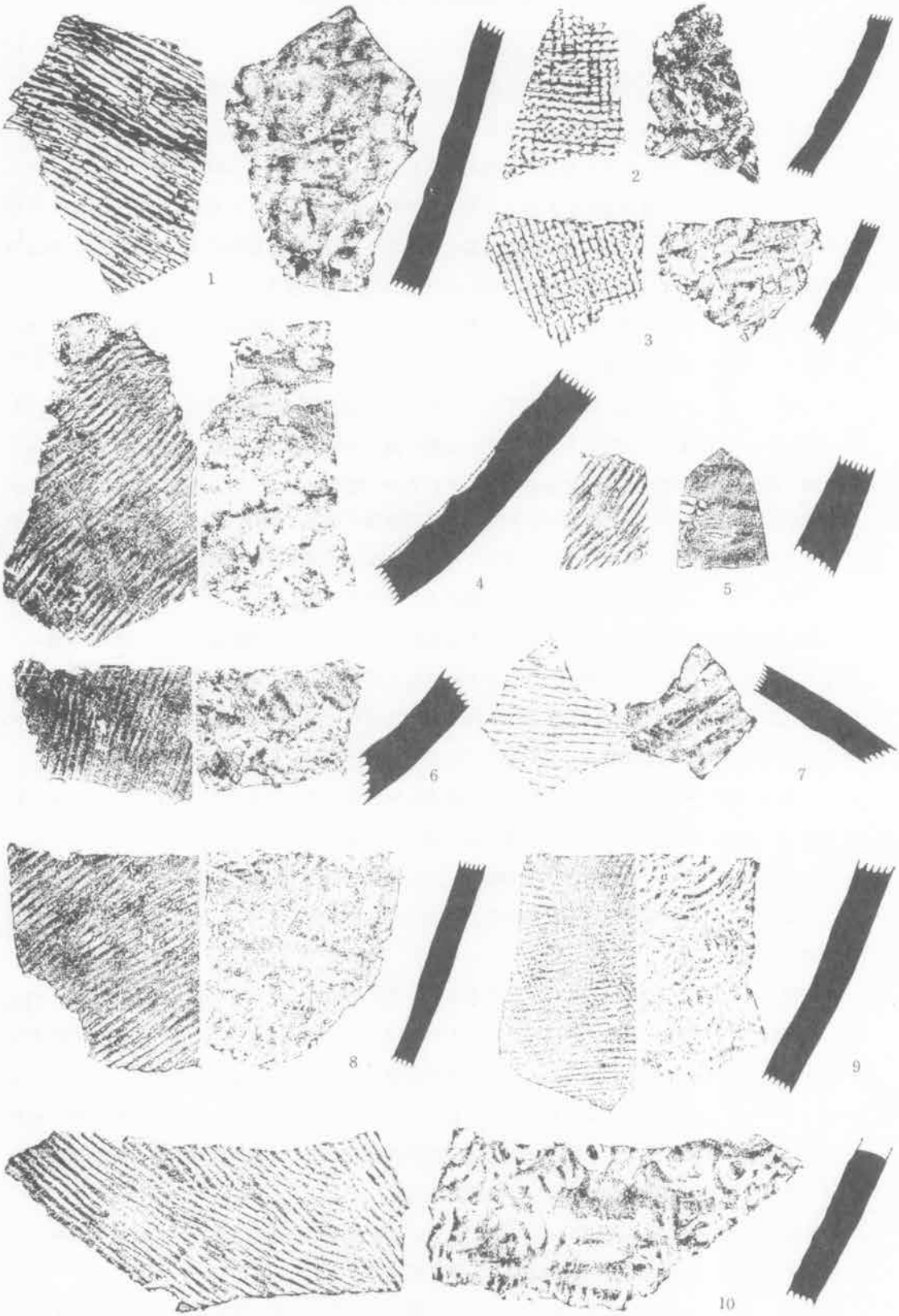
B II類　（8・14）の他、破片がかなり量出土している。B I類に類似した右上りの平行叩きと、弱い刷毛調整を併用。胴部上半部のものと思われるものの内面調整は、同心円叩きの後、丁寧なナデ調整により叩き目を磨り消し、さらに外面と同一の工具による刷毛調整を加えている。下半部と思われる破片はナデ調整を欠き、同心円叩きの後、直接に刷毛調整を加えている。⑾は同心円叩きのみで、刷毛調整をも欠くものであるが、同一類に属する底部破片の可能性が濃い。胎土は多量の砂粒を含み粗い。焼成良好。色調青灰色。火を受け器面および割れ面に煤付着。⑻はC地点、⒁は包含層出土品。なお、他に01大溝出土の破片あり。

B III⒄　間隔のあいた平行叩き（0.6cm）をもつ。底部に近い破片と推定され、叩きの方向不明。内面は円心円の叩きと平行叩きを併用。胎土は小砂粒を含むが良好。焼成堅緻。色調暗青灰色。01大溝出土。

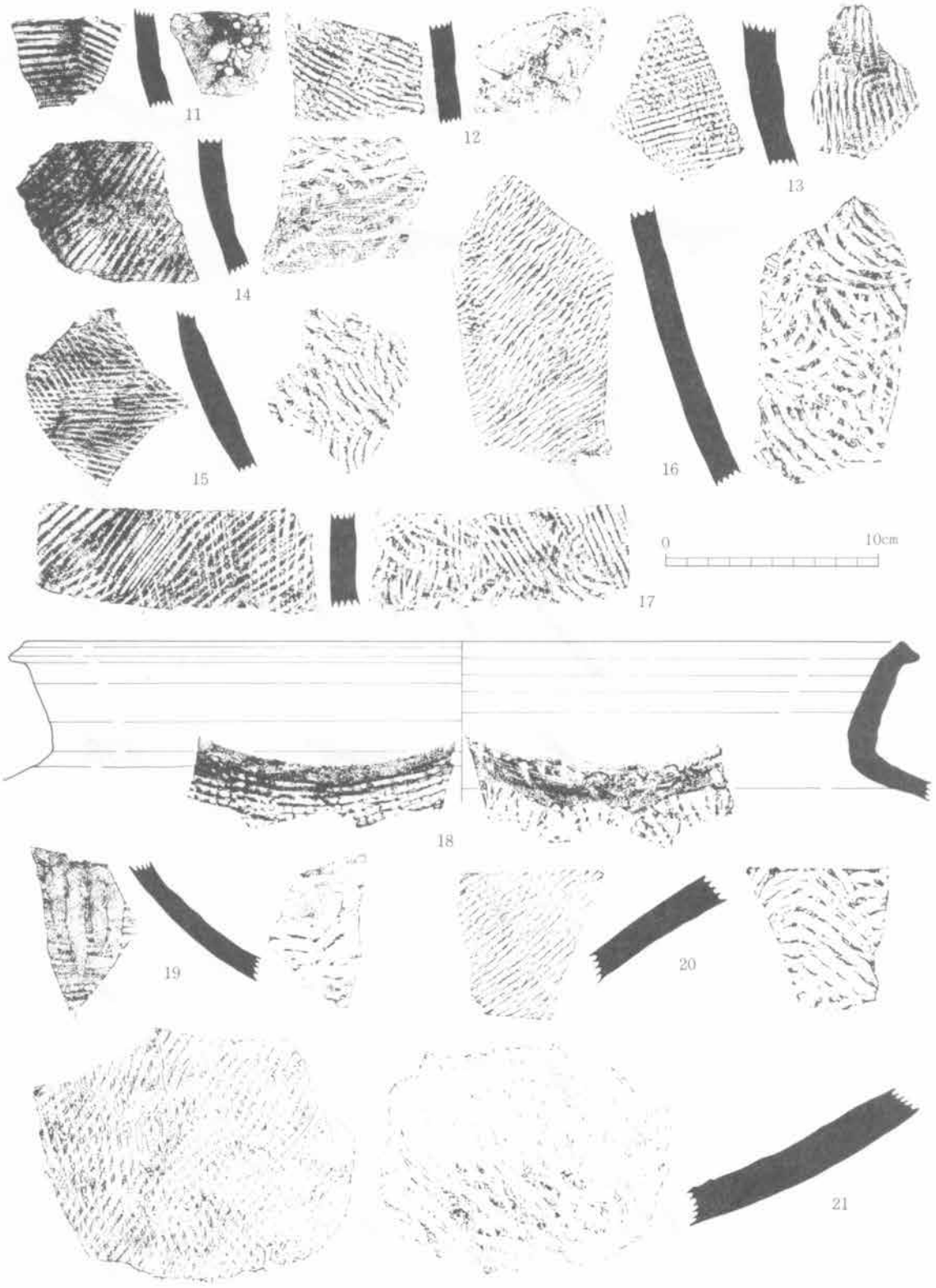
B IV類（9・10）　内面に同心円の叩きをもち、それを粗いナデにより部分的に磨消しているものを一括した。外面の平行叩きは幅の広いもの（10・0.5cm）と狭いもの（9・0.3cm）があり前者は左上り、後者は右上りに叩いている。内面調整は、まず前者は幅の広い凹部を持った同心円叩きで、凹部には板目かと思われる条線が認められる。ナデ調整は粗い。後者は幅の狭い線刻状の同心円叩きによっている。胎土はともに砂粒を含みやや粗い。焼成良好。色調暗灰色。ともに火を受け器面および割れ目に煤付着　01大溝出土。

B V類⑸　細片のため詳細不明。外面は⑽類似の平行叩き、内面はナデ調整の後、刻印状の叩きを持つ。胎土・焼成良好。色調暗青灰色。不定形遺構出土。

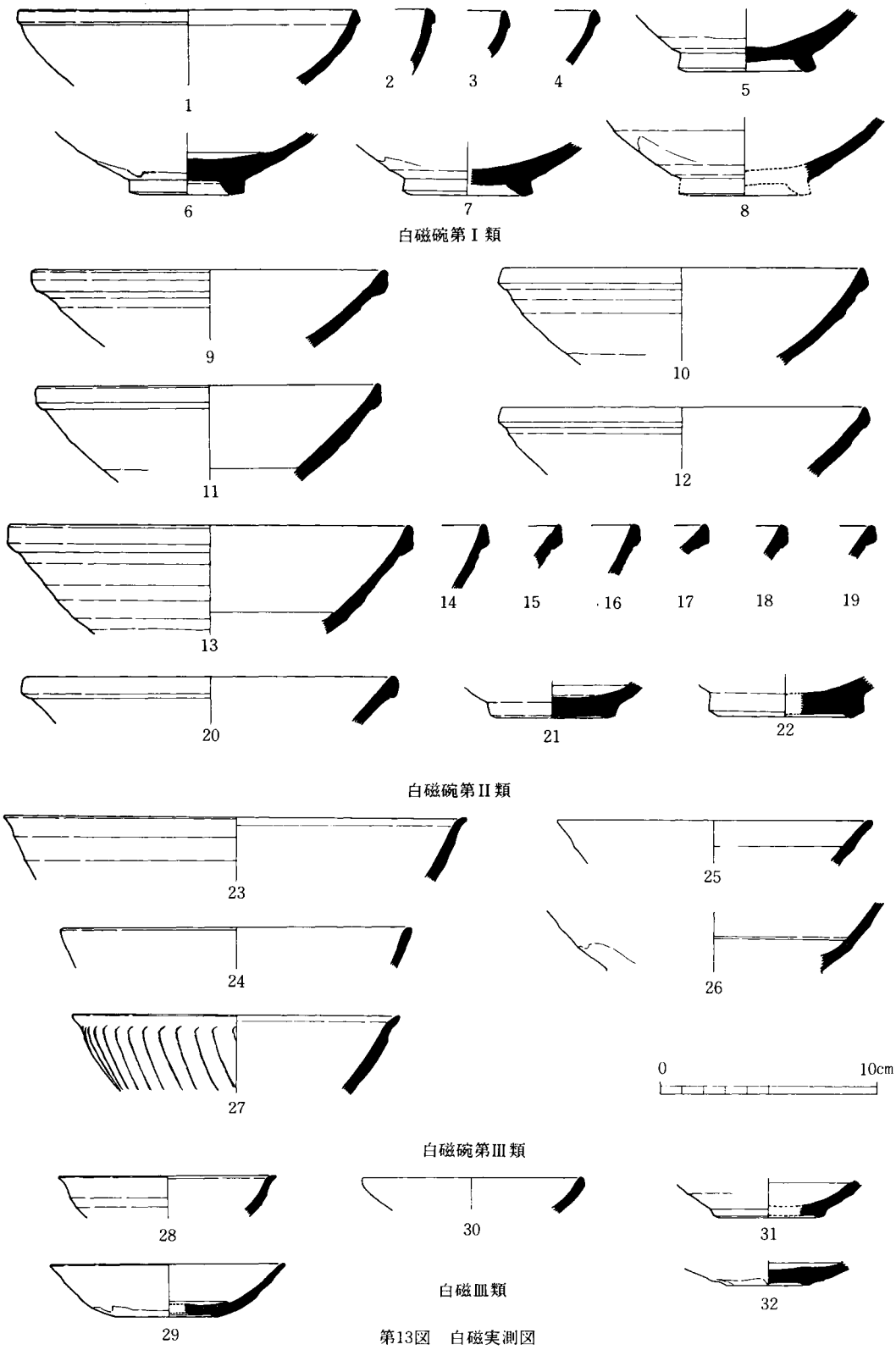
B VI類　（15・16・20）の他、破片はもっとも多い。内面の調整が同心円叩きのみのものを一括に扱った。外面の平行叩きは総べて狭いものが多い。内面は叩きの凹凸が鋭い。凹部に条線が



第11図　須恵器拓影



第12図　須恵器拓影


1
2
3
4
5
6
7
8
白磁碗第Ⅰ類
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
白磁碗第Ⅱ類
23
24
25
26
27
0
10cm
白磁碗第Ⅲ類
28
29
30
31
32
白磁皿類

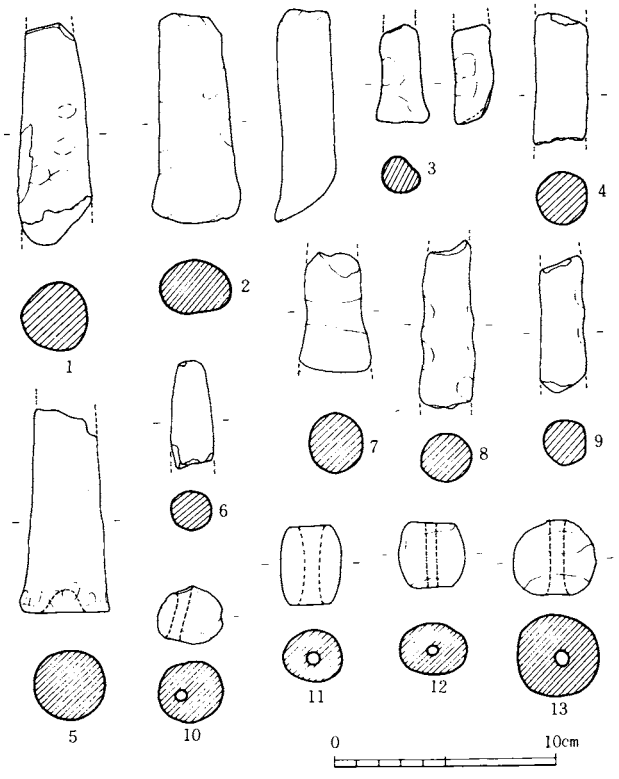
第13図　白磁実測図

認められるもの⒂と、そうでないもの（16・20）に二分できる。焼成は堅緻で、淡青灰色から暗紫灰色を呈するものが多い。胎土良好。⒂は包含層、⒃は耕土、⒇は01大溝より出土。なお、1点（01大溝出土品）のみであるが火を受け器面に煤を付着しているものあり。

B Ⅶ類（11・19）　以上の範疇に属さないものを一括した。壺ないし瓶の細破片の可能性もある。⑾は底部に近い破片で、外面は平行叩き内面はナデ調整を施している。⒆は外面粗いナデ調整、内面はナデ調整と同心円叩きを併用している。ともに胎土良好、焼成堅緻。色調は⑾が淡青灰色、⒆は暗青灰色。⑾は耕土、⒆は01大溝出土。

以上の甕破片の内、01大溝・C地点出土品で、火を受け煤を付着している一群（Ⅰ・AⅣ・BⅠ・BⅡ・BⅣ類）は少なくとも同一時期に利用されていた一括品と考えられるものである。その理由については別に触れているので省略する。

その他の土製品（第14図）　支脚形土製品（1～9）　10数個体分出土。すべて包含層・耕土からの出土品で、時期不明。形状・大きさにより3形態に分類できよう。その①は出土品中では大型のもので（1・5・7）の他、数個体分の出土例がある。法量は⑸で見た場合、最大幅3.9cm、長さ9.2cm以上を測る。⑸の場合下端にへこみを持つが、すべてが同種のへこみを持っていたかどうか明らかでない。その②は先端部が刃部状に鋭るもので、出土例は1例のみである。最大幅4.0cm、長さ9.5cm以上。その③はやや細い棒状をなすもの（4・8・9）で出土例は多い。先端および下端の形態不明。先が細くなって終る⑹あるいは先端部がその②同様刃部状をなす⑶がそれぞれ先端および下端であった可能性を持つ。胎土は砂粒を多く含み粗い。色調は⑵が淡褐色。二次的な加熱により器面は脆い。



第14図　支脚形土製品・土錘実測図

土錘（10～13）　4個体出土。包含層・耕土からの出土品。球形のもの（10・13）と、やや細長い筒状のものがある。重さは⑽が25g、⑾が24g、⑿が27g、⒀が43gを測る。胎土は砂粒を含み粗い。色調は淡褐色で焼成は良好。

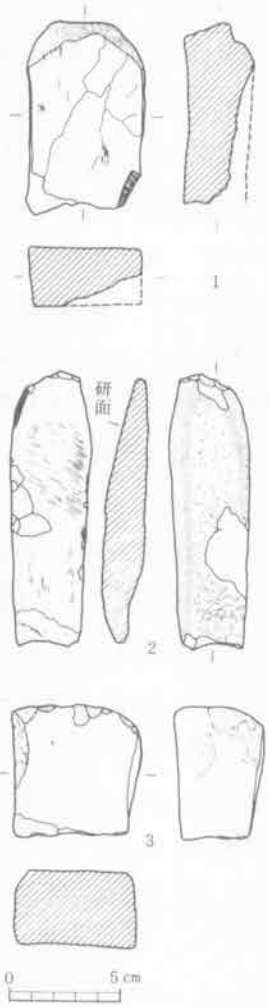
フイゴ羽口　01大溝より細破片若干が出土している。

2）石製品（第15図、図版21）　砥石3点出土している（第15図1～3）　⑴は研面を3面もち、うち2面はU字状にへこんでいる。

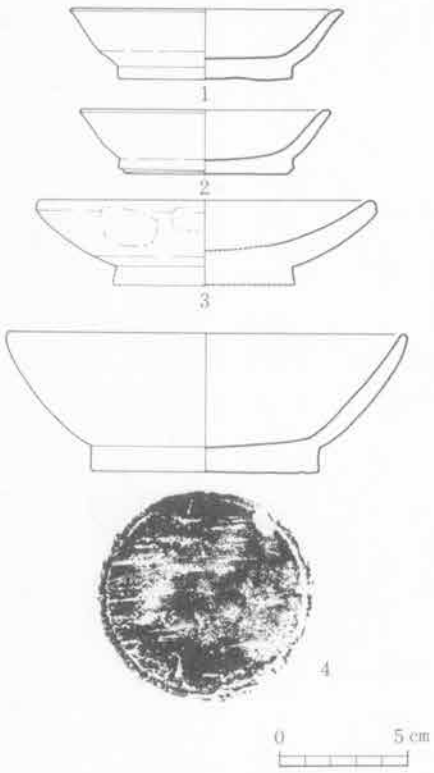
また、U字状にへこんだ研面には粗い条線状の削痕が認められる。火を受け研面の一部剝離、粗粒泥岩製。(2)は自然面を残した不定形な砥石で、研面は1面のみ。中央部に細い条線状の削痕を持つ。火を受けている。頁岩製。(3)は長方体をなすもので、中程で折損。研面を4面もつ。砂岩製。(1)は01大溝、(2)は02大溝、(3)はC地点より出土。

3） 木製品 供膳具（第16～18図 図版15・18）

漆器椀・皿 皿3点、椀1点の計4点出土している（1～4）。(1)は口径10.7cm、器高2.8cm、底部径6.7cmを測る皿形のもので、縦木取り。体部下半にはりをもって外反する口辺部と、ベタ高台風の底部を持つ。底部も含め器壁全面黒漆塗り。(2)は(1)とほぼ同形のもので、口径9.8cm、器高2.5cm、底部径6.8cmを測る。縦木取り。内面は朱漆塗り、外面および底部は黒漆を塗っている。(3)は（1・2）に比較して粗製品。口径13.0cm、器高は高台を欠損しているが3.4cm程度、底部径も7.0cm程度と推定される。横木取り。器肉の厚い口辺部を持ち、先端部は摩耗している。口辺部中程に荒整形の段階の工具痕かと思われる削り痕が認められる。内外面とも黒漆を塗っている。(4)は椀形品で、口径15.5cm、器高5.5cm、底部径8.8cmを測る。横木取り。口辺部は器肉を薄く仕上げているが、口辺部と底部との境は特に薄くなっている。底部は鏟状の工具で削って仕上げており、造作はやや粗い。底部外縁に沿って幅1～2mm程度の沈線がめぐっている。黒漆塗り。（1・2・4）は01土壙出土。(3)は01大溝より出土。



第15図 砥石実測図

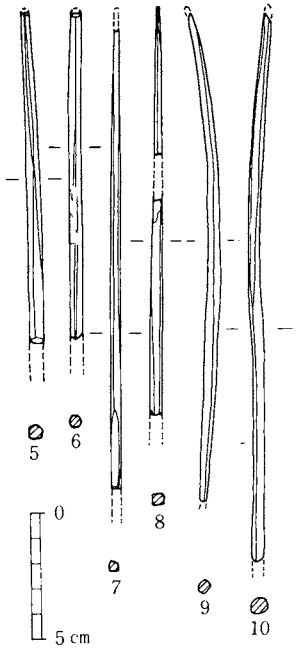


第16図 漆器椀・皿実測図

箸状木器(5

～10）　7個体分出土している。細い角材を粗く整形したものと、丸棒状に整形したものとがある、総じて調整は粗く、本と末の区別はない。長さは完形のもの(9)で19.2cmを測るが、一部を欠失しているもの(10)に22.0cmを測るものがあり、ばらつきがある。太さも0.6cm～0.6cmまでのものを含む。（5～10土壙出土。他は01大溝出土。

曲物容器（17～21）　曲物の底板と推定されるもの5点が出土している。板目の板材を用いたもの(18)と、柾目の板材を用いたもの（17・19～21）とがある。両面を鋤と推定される工具でととのえ、側面は垂直ないしはいくぶん法をつけ、円形になるよう削っている。大きさは三種に大別でき、径20cm内外のもの（18・19）、径15cm内外のもの（17・20）径11cmのもの(21)とがある。釘孔は充分観察できなかったがもっとも多いもの(18)で8孔前後、少ないもの(21)で4孔前後かと推定される。（17・21）の両面、（18～20）の片面は漆をうすく塗っている。

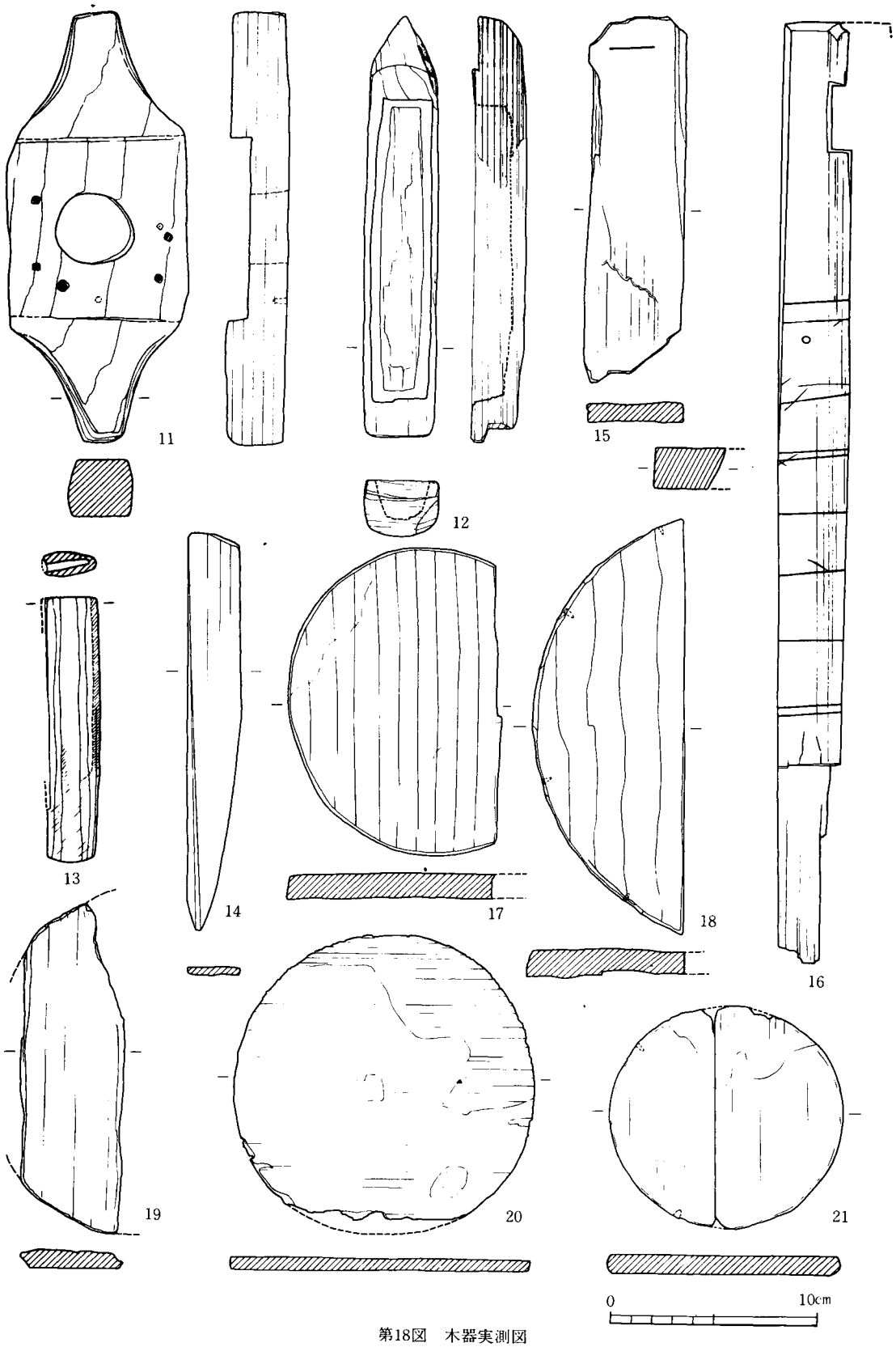


第17図　箸状木器実測図

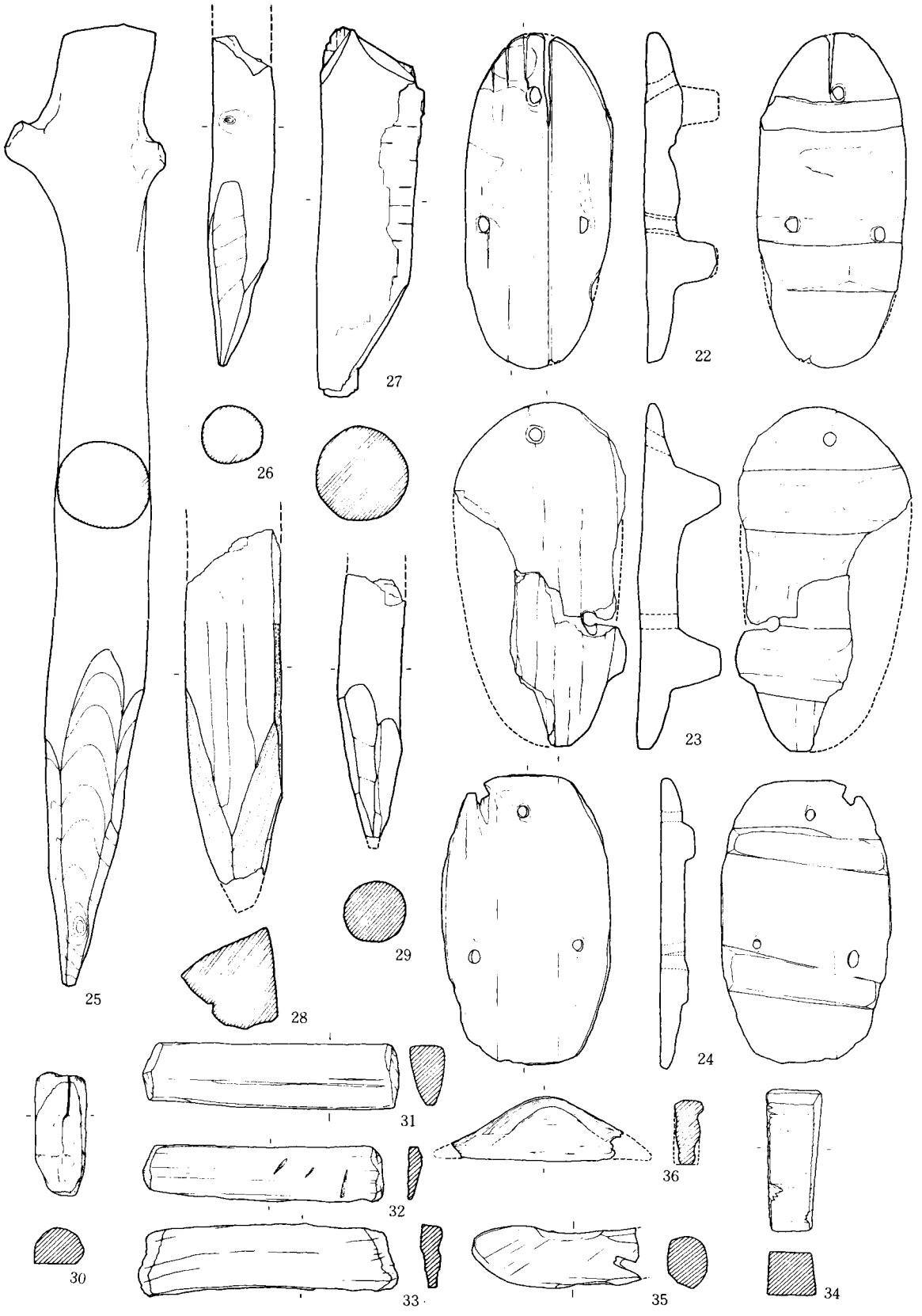
編　具　糸巻(11)　枠木と横木および横木の心にとおす軸棒からなる構造の糸巻で、横木1点が出土している。長さ20.5cm、幅8.6cm、厚さ3.0cm、軸孔の直径3.5cmを測る。対となる横木を組み合すための切り欠きは、深さ1.0cmを測り、装着する為の木針孔が7孔認められる。01大溝出土。

服飾具（第19図　図版16）　下駄（22・23・24）　3点出土している。(22)は平面形小判形の下駄。板目板を使用。歯は連歯で、台をくりぬいて作っている。指のあたる部分が摩耗している他、横緒をたがいに結んだ台裏の部分も著しく摩耗しているなど、よく使用されている。長さ22.0cm、最大幅9.5cm、台の厚さ2.5cm。(23)は左側がふくらんだ小判形の平面形を持つ下駄。板目板を使用。中程で折れている。歯は連歯で、台をくりぬいて作っている。歯は、はきぐせが悪く左側のみが著しく摩耗している。長さ23.0cm、最大幅11.0cm、台の厚さ2.5cm。(24)は隅がやや角ばった小判形の平面形をもつ。形態は前二者とやや異り台は薄く、歯も摩耗しているが低いものであったと推定される。板目材を使用、歯は連歯で、台をくりぬいて作っている。鼻緒の孔および歯はよく摩耗している。長さ19.2cm、最大幅11.2cm、台の厚さ1.5cm。(22)は不定形遺構出土。(23)は01大溝出土。(24)はC地点出土。

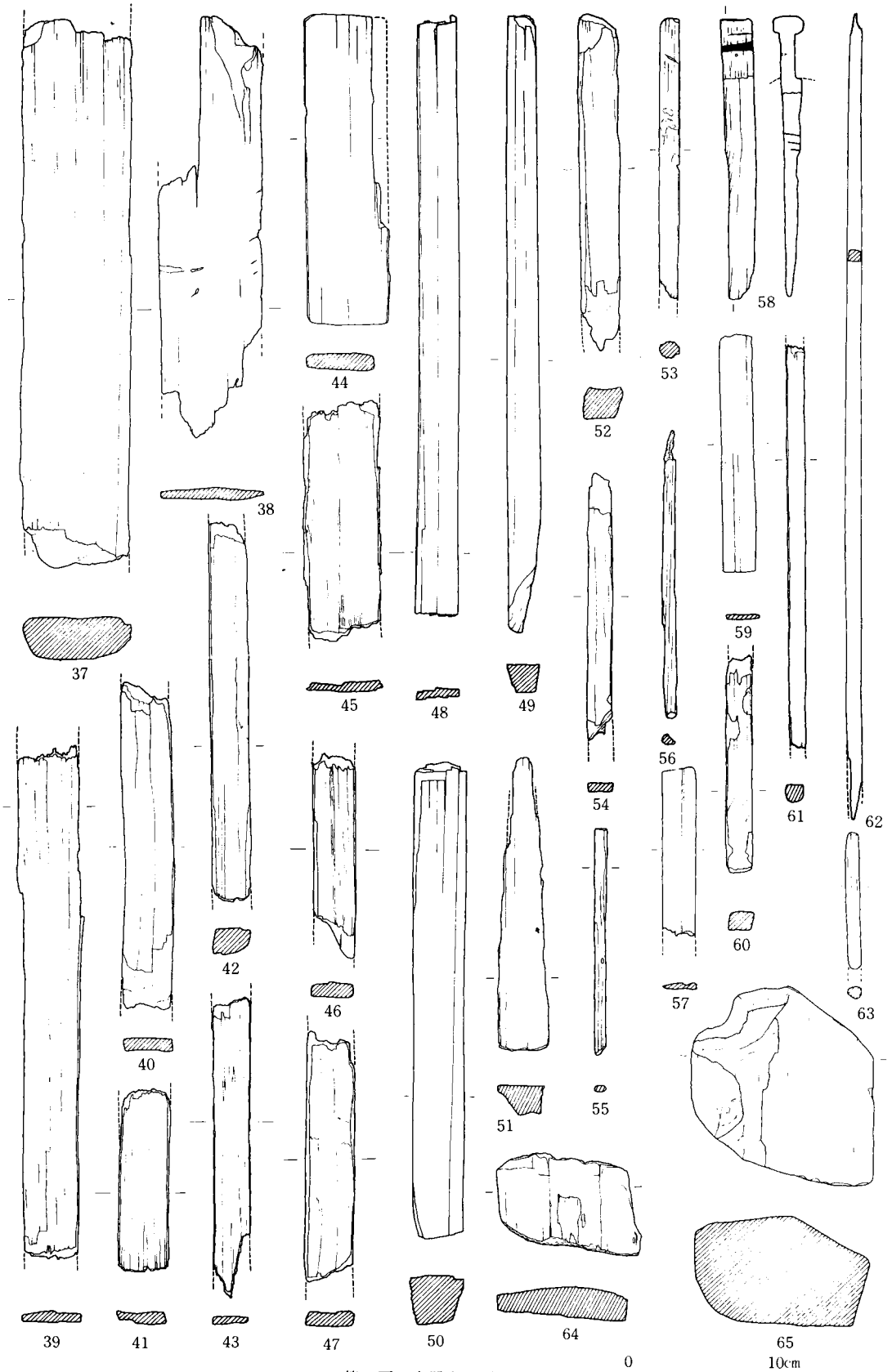
工具（第18図）　刀子鞘(13)　背部に寄せ木を嵌め込む形式の鞘。寄せ木は欠失。鞘尻部は丸く



第18図　木器実測図



第19図　木器実測図


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
0
10cm

第20図　木器実測図

第21図　木器実測図

削り、側面も平滑に仕上げている。挿入部の背幅0.4cm、刃部幅は2.1cmを測り、奥行きは9.0cmまで確認できる。長さ13.0cm、最大幅2.8cm、厚み1.2cm。01大溝出土。

部材（第18～21図　図版17～20）　部材ないしは木取り後の残材を一括した。

割り裂いた板材（37～48・51～57・59～62・68～70）　出土木器のほとんどを占める。幅および厚みにより6種に分割できるが、全形の分る資料はない。①幅12.0～8.0cm、厚み約3.0cmのもの（68～70）。類例は少ない。②幅約7.0cm、厚み約2.5cmのもの(37)。類例は少ない。③幅約6.0cm、厚み1.0cm程度（厚み以下③～⑤同様）のもの(38)。類例少ない。④幅約3.5cmのもの（39～41・45・47）。類例は比較的多い。⑤幅約2.5cmのもの（42・43・46・48・52）。類例はもっとも多い。⑥幅約2.0cmのもの（54・57・59）。類例は⑤に次ぎ多い。総て01大溝出土。

割り裂いた角材（42・50～52・60～62）　割り裂いた板材同様、幅および厚みにより5種に分割できるが、全形の分る資料はない。①幅・厚みが3.5cm程度のもの（50・51）で、類例は少ない。②幅・厚みが2.5cm程度のもの（42・52）。③幅・厚みが1.5cm程度のもの(60)。④幅・厚みが1cm程度のもの（61・62）。(61)は削って丸く仕上げた部分を持つ。01大溝出土。

丸棒（56・63）　角材を削って丸く仕上げたもので、径0.8cm程度を測る。01大溝出土。

切り込みのある部材(58)　欠損品のため全形は分らないが、先端部に二方向から長さ3.0cm、深さ0.5cm以上の切り込みを入れている。切り込みの一方に焼けた鉄棒状のものでつけたと思われる溝状のへこみが認められ、その下に木釘孔が認められる。また中央部側面には6条からなる削痕が認められる。長さ18.0cm以上、幅・厚み1.2cm以上×2.0cm。01大溝出土。

厚い板材（66・67）　2点出土している。(66)はほぼ中央に柄穴を持ち、(67)は上端部に未貫通の小孔を穿っている。ともに上下端を鑿状の工具により粗く截断している。本来は長大な部材であったものを、礎板等に転用するため截断したものと推定されるが、用途不明。(66)は下方に焦げ跡を残す。法量は(66)が51.0cm×22.0cm、厚さ約4.0cm。(67)は45.0×19.0cm、厚みは最大部分で6.5cmを測る。

木取り後の部材（15・33・34・44・64・65）　（44・15・33）は割り裂いた板材の両端に切截の跡を残すもので、(15)は小刀状の工具、(33)は手斧状の工具、(44)は鋸によって切断したもの推定される。法量は(15)が長さ18.0cm、幅4.5cm、厚さ0.8cm。(33)が長さ17.0cm、幅4.5cm、厚さ1.0cm、(44)が長さ20.0cm、幅5.2cm、厚さ1.0cmを測る。(34)は厚い板材を鋸で切断した残材で、長さ3.0cm、幅9.0cm、厚さ2.5cmを測る。（64・65）は木塊から手斧状の工具で截断した残材で、不規則な切截面を残す。長さ25.0cm程度のものも有るが、図示した(64)は長さ9.0cm、幅6.0cm、厚さ2.0cm、(65)は長さ12.0cm、幅11.0cm、厚さ7cmを測る。総て01大溝出土。

杭（25～29）　出土例は多い。自然木の先端を尖らしたものの大小2種と、割り材を用いたものとの3種に大別できる。(25)は全形を知り得る唯一の例で、(27)とともに自然木を用いた大型品に属する。長さ64.0cm、直径約6.0cmを測り、先端を鉛筆状に削る。(27)は長さ25.0cm、直径約6.0

測り、上下端とも切截されている。樹皮残る。（26・29・30）自然木を用いた小型品で、ともに上部を欠損している。先端を鉛筆状に削ったものと、一度に切截したものとがある。(26)は長さ22.0以上、直径約4.0cm、(29)は長さ17.0cm以上、直径約4.0cm、(30)は長さ8.0cm以上、直径約3.5cm。(28)は不定形な角材を用いたもので、上部を欠損している。先端は数度分け、やや粗く削っている。長さ23.0cm以上、最大幅6.5cm。総て01大溝出土品。

用途不明木器　（第18～20図　図版15・17～19）　形態上完結しているが、用途が明らかでないものを一括に扱った。その他、用途の明らかでない板材・角材が多量に出土しているが、これらは別項を設けて紹介したい。

舟形木器(12)　丸木舟を忠実に模した刳り抜きの舟模形。舟尾・舟首を丁寧に削り出し明瞭に表現している。舟内部は幅2.5cm、長さ14.6cm、深さ1.8cmを測る。舟内部の調整は粗い。舟は底を丸く削り、横断面は中央部でもっとも幅の広い丸木舟様の「U」字形をなす。船首付近側面が黒く焦げている。長さ20.5cm、最大幅3.6cm、高さ2.7cm。01大溝出土。

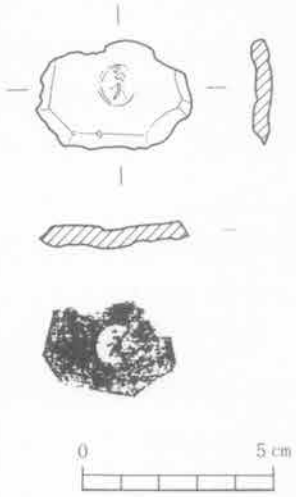
刻線をもつ角材(16)　柾目材・半欠品。1方の端に柄穴状の孔を穿ち、片面に浅い溝状の刻線をもつ。刻線の間隔は等間隔ではなく、2条一組のものないし1条のものが8組認められる。ほぼ中央部に貫通していないが、径0.7cmの円孔が認められる。図示した裏面が火を受け焦げている。長さ36.0cm以上、幅3.5cm以上、厚さ2.0cm。01大溝出土。

ヘラ状木器(14)　板目の板材。側面を鋭い工具で削り刀子形に仕上げているが、削り面は側面に対し水平で、刃部状をなさない。長さ19.5cm、最大幅2.5cm、厚み0.4cm、01大溝出土。

つちのこ状木器（31・32）　(31)はむしろ等の編み具の重りに類似した形態を持つ。両端を鋭い工具で切り、側面を丁寧に削り整形している。長さ17.0cm、最大幅4.3cm、厚み2.3～0.5cm。01大溝出土。(32)は割り裂いた板材を使用。両端を鋭い刃物で切っている。上端は幅0.7cm程度の面をなすが、下端は刃部様に尖る。長さ15.6cm、幅3.6cm。01大溝出土。

削り出しをもつ木製品(34)　頂部の丸い三角形状をなすと推定されるが、両端は欠失。上縁を工具で削り、その縁に沿って幅1.0cm程度、高さ0.4cm程度の隆帯を削り出している。裏面の加工は認められない。長さ14.0cm以上、最大幅4.5cm、厚さは頂部で約2.0cm、下辺で1.6cm程度を測る。01大溝出土。

柄状木器(35)　自然の枝材を部分的に加工、半欠品。1方の端を削り丸く仕上げ、側面は片面のみを加工。自然面を多く残す。長さ11.0cm以上、最大幅4.0cm×2.5cm。01大溝出土。



第22図　延板状純銀製品実測図

串形木製品(49)　棒状割材を用いたもの(49)の他、丸棒を用いたもの、自然木を用いたものが在り、さらに両端を尖らせたものおよび片方のみのものの区別がある。(49)は先端が摩耗している。01大溝出土。

4）金属製品および鉱滓（第22図　図版21）金属器には用途不明の延板状純銀製品と、貨幣および鉱滓がある。

不明純銀製品(1)　幅3.2cm、長さ2.2cm、厚さ0.4cm、重さ29.4gの延板状純銀製品。周辺にタガネ状工具による切り痕があり、中央に丸形枠に「永」の字の極印が認められる。01大溝出土。用途については明らかでないが、近世に使用された越後銀の内の永字銀といわれるものと類似している。今後とも検討していきたい。

貨幣　02大溝より紹聖元宝（北宗1094年）、耕土中より寛永通宝が出土している。紹聖元宝は02大溝の溝底に密着して出土したもので、02大溝の上限年代を決定する有力な資料といえる。

鉱滓　鉱滓は01大溝の他、02大溝、01溝、01・02・12・17・18土壙、不定形遺構より出土している。鉱滓については01大溝出土品中の4点を石川県立工業試験所で分析していただいた。同時に分析をお願いした加賀市内の資料2点の分析結果と合せ掲載しておく。なお、サンプルNo.3は炉壁と推定される資料である。

第2表　加賀市田尻シンペイダン遺跡出土鉱滓化学分析表

（分析者：石川県工業試験場　岩松基茂・西村芳典）（単位　%）

成分	SiO_2	Al_2O_3	FeO	Fe_2O_3	CaO	MgO	TiO_2	V_2O_5	MmO_2
01大溝出土No.1	13.52	4.90	40.47	10.08	0.06	2.60	25.20	0.51	1.02
〃　No.2	10.42	2.74	57.03	24.35	1.90	0.39	1.68	0.03	0.19
〃　No.3	65.01	22.17	0.75	6.70	0.11	0.95	1.26	—	0.13
〃　No.4	25.04	8.28	15.34	20.06	4.76	1.80	18.90	0.40	0.79
二子塚遺跡（奈良）	38.52	14.02	18.85	19.92	0.14	0.82	4.20	0.03	0.14
勅使遺跡（古墳？）	13.05	6.53	44.09	21.40	0.06	1.35	11.62	0.51	0.30

成分	Cr_2O_3	CuO	CoO	P	S	C	Na_2O	K_2O
01大溝出土No.1	0.06	—	0.001	0.031	0.030	0.30	0.68	0.72
〃　No.2	0.04	0.003	0.004	0.077	0.022	0.61	0.34	0.36
〃　No.3	0.01	0.004	—	0.076	0.003	0.02	0.57	2.16
〃　No.4	0.11	—	0.013	0.025	0.220	3.00	0.41	0.84
二子塚遺跡（奈良）	0.01	0.002	0.003	0.076	0.035	0.41	0.54	1.80
勅使遺跡（古墳？）	0.13	0.003	0.004	0.027	0.050	0.32	0.27	0.24

※分析方法：原子吸光分析法を主とする。

5）その他の遺物　藁製品と自然遺物を一括した。藁製品では縄および同種の縄を用いた加工品の残欠がある。これらはモミおよび藁等とともに01大溝底より炭化した状態で出土した。自然遺物では種子（クルミ・トチ・ドングリ・モモ・モミ）および獣歯（ウマ？）がある。モモが01土坑、モモを含め他の総てが01大溝より出土している。自然遺物については今後鑑定の機会を持ち別に報告したいと考えている。

5.小　　結

田尻シンペイダン遺跡は、古代末期の製鉄集落の具体像を追求する上ですこぶる優れた、そして条件に恵まれた遺跡であったといえる。しかし、当報告ではその成果をほとんど盛り込むことができなかった。この点については今後報告の機会を持つということで御容赦願いたい。以下01大溝出土器の構成と特色を整理し、合せて県下の平安時代土器変遷を素描することでまとめに変えたい。

1） 01大溝出土土器の特色と年代

01大溝出土土器は、きわめて一括性の高い土器群であると同時に、県内では初例の資料といえる。出土土器は少量の輸入磁器と土師器（内黒土器含む）須恵器からなる。供膳形態は磁器、土師器、貯蔵形態は須恵器からなり、今回の調査では煮沸形態の土器は確認できていない。また、それに変るものもない。先に分類した土器の内、一括と判断されたものを列記すれば次のように整理できよう。なお、須恵器甕については二次的に火を受けた一部のみをとり上げた。

磁器

土師器小皿・椀（小皿Ａ～Ｈ類、Ｊ類　無器台椀Ａ～Ｅ類　皿Ａ～Ｃ類　高台付椀Ａ～Ｊ類　小堝）

須恵器甕（ＡⅠ・ＡⅣ・ＢⅠ・ＢⅡ・ＢⅣ類）

土師器は小皿と高台付の椀・皿、無高台の椀・皿で構成されその他、小堝とでも称すべきもの１点がある。先行する土師器の系譜で理解できるもの（椀Ａ・Ｂ類、高台付椀Ａ・Ｂ・Ｃ類等）は少なく、当該期に初現する器形が大半を占める。その内では磁器小皿の影響を受けたものが少なくない。また、先行する土器群との系譜で考えた高台付椀Ａ類でも、体部の器形は初期の瓦器との強い類縁性を推測させる。調整手法は大半がヨコナデ、底部糸切りによっているが、椀Ｃ・Ｄ・Ｅ、高台付椀Ｅ類は糸切り手法を用いていないようである。中でも椀Ｃ類、高台付椀Ｅ類は口唇部を面のある調整具のナデを重ねることにより丸く仕上げるとともに、体部・底部をナデ調整している。手法上畿内およびその周辺部の黒色土器との類似を考えておきたい。また、胎土はそれぞれの器形と密接な対応関係を持っており、器形の豊富さと合いまって、複数の供給先を予測させる。

以上のごとく当該期の土師器は一面として先行形式とは断絶した在り方を示し、もう一面として他の器物から器形を模するとともに、他地域の土器群の影響を直接的に受け入れた固有性の弱い土器群と理解できないであろうか。これら土器群の分布については、具体例に乏しいが、丹後地域で類例が認められ、現状では日本海沿岸にその分布圏を予測できよう。

当該土器群の年代は、平安京藤原国明邸井戸[8]８掘り方出土品が一つの基準となろう。同遺構で

は寛治５年（1091）の墨書銘を持った須恵器に伴い、当遺跡小皿Ｄ類の類似品および白磁椀Ｉ類が出土しており、当該土器群の存続期間の１時点を11世紀末に置くことができよう。そのことは当遺跡の併出磁器の年代観とも矛盾しない。また、当土器群のもつ時間帯については、まず下限は12世紀後半代には出現する珠洲焼等中世陶器を当土器群が含んでいないことが一つの視標になり、上限は先行形式である三浦上層の土器群が11世紀前半～中葉を大きく動かない土器群と推定されることから、11世紀後半代でもその前半代には遡上しないものと考えられる。ただ、この土器群が約１世紀の時間帯のどの部分に位置づくかは現状では予測的な見解に留めざるを得ない。今、しいてその時期を予測するならば、絶対年代の判断資料とした土師器小皿Ｄ類が、01大溝より後出の02大溝を切って造られた01土壙中より出土している点と、高台付椀Ａ類の形状が初期瓦器に近い形態を持つことより、先に設定した時間帯の内でも、その前半部分に中心を持つ土器群と推定できるのではなかろうか。

2）平安時代須恵器・土師器編年への覚え書

はじめに　県内の平安期土器編年については、1967年吉岡康暢[(2)]によりその大要が提示されている。同氏の検討結果はきわめて画期的なものであったといえ、その後の県内の編年的研究は、同編年をトレースしつつ資料を集積する方法で進められていったといっても過言ではない。しかし、1971年、高島忠平により平城京三坊大路東側溝出土の灰釉陶器の検討結果[(3)]が発表されて以来、特に実年代の設定をめぐり少なからざる混乱が起ってきていることも否めない。具体的には楢崎彰一の編年に準拠した吉岡編年観と、高島忠平の編年に準拠した富山県在住の研究者による編年観[(5)]との間で表面化しているといえよう。筆者は両編年観の混乱が楢崎・高島編年のズレに主要因のあることを否定するものではないが、両氏の編年を注視する反面、それぞれの地域で、具体的な土器変遷の姿をつかもうとする作業がかならずしも多くなかった所にもかなりの原因があったと考えている。

ここに「平安時代の須恵器・土師器編年への覚え書」として報告するものは、きわめて不充分なものであるが、９世紀～12世紀までの土器変遷の粗描を目的としたものである。そのため、従来ややもすれば不鮮明になりがちであった戸津４号窯期、および三浦上層期[(5)]に編年的位置を与えることに力点を置いた。具体的には、９世紀～10世紀は須恵器の変遷を軸に、11世紀～12世紀は土師器の変遷を追跡する方法で検討してみた。須恵器変遷と土師器変遷の整合、10世紀以降特に顕著となる地域色の検討等、保留すべき部分を多く残しているが、平安期土器編年を考える上での叩き台となれば幸いである。

各時期の概要　平安時代の須恵器・土師器の変遷を第３表のごとく５段階８小期に分割し、小期の内、様相差で分割できるものはさらに新・古に細分した。各段階の視標を第１段階――奈良時代から平安時代への器種構成の過渡期。第II段階――平安時代須恵器生産の盛行期、第III段階

——須恵器生産の衰退と土師器の量産期　第Ⅳ段階——須恵器生産の廃絶時期（貯蔵形態は移入須恵器、供膳形態は少量の輸入磁器と土師器からなる段階）　第Ⅴ段階——中世陶器の出現期として理解した。

以下Ⅰ～Ⅲ段階の変遷を供膳形態を中心に略述していきたい。

第1段階　奈良時代に盛行した器形が残るとともに、平安時代の器種構成がまだ充分に定着[7]していない過渡的段階として把握できよう。窯跡ではやや新らしい要素を持つが戸津5号窯（小松市）、集落遺跡では三浦遺跡中層出土品[8]（松任市）、東大寺領横江荘々家跡[9]（松任市）等が該当しよう。ただ、集落遺跡の内の後者はⅠ期よりも後出の遺物も含んでいる。

戸津5号窯出土品は、高台付の坏の出土例が少ないことや、当該期ではかなりの頻度で認められる煮沸形態の甕・鍋等を含んでいないなど、Ⅰ期の器種構成を完存したものとはいえないが、当該期の様相は充分に伝えてくれる。奈良時代に盛行した高台付盤、台付長頸瓶が残る一方、新らしい器種として細頸の長頸瓶や肩衝壺が加わるとともに、双耳瓶も量産化のきざしをみせる。また、三耳瓶の存在も当該期の特色とみてもよいであろう。その他、奈良時代窯では一般に認められた高坏が姿を消していることも見逃せない。

第3表　平安時代須恵器・土師器略年表

		須恵器窯	集落遺跡等
Ⅰ		戸津5号窯	三浦遺跡（中層） 東大寺領横江荘々家跡
Ⅱ	1	(古)黒川2号窯	(＋)
		(新)池崎窯 洲衛窯	(＋)
	2	給分・小袋窯	深江遺跡
Ⅲ	1	戸津9号窯 戸津4号窯	古府しのまち遺跡（土壙） 安養寺遺跡（71土壙）
	2	戸津3号窯	安養寺遺跡（91土壙）
	3	(＋)	三浦遺跡（上層） 安養寺(上林地区)遺跡(7・8号土壙)
Ⅳ			田尻シンペイダン遺跡
Ⅴ			(＋)

当該期の土師器は煮沸形態に主体を置いている。供膳形態では三浦中層出土品に見るごとく、赤彩した椀・蓋等精選品若干が認められるが、これらは供膳形態に占めた須恵器の欠を補綴するようなものではなかった。また、黒色土器の確実な共体例も知らない。

Ⅱ段階　2小期に分割し、$Ⅰ_1$小期はさらに新・古に細分してみた。当該期は平安時代須恵器の器種構成が確立するとともに、煮沸形態の一部をも須恵器が補綴した平安時代須恵器生産の盛期と考えたい。$Ⅰ_2$小期では須恵器の機能別生産体制に変化のきざしが現われるが、基本的には当該期の土師器は煮沸形態に主体を置き、供膳形態のそれは須恵器の欠を補綴するようなものではなかったと考えたい。

〈第1小期〉　須恵器では平安時代器種・器形の完成期で、北陸独自の地方色が顕在化する。土師器は良好な集落遺跡例がなく、不明な点が多いが、基本的にはⅠ段階の延長ととらえておきたい。

ただ、量的な問題は別として、内面黒色の椀類は確実に出現していると考えられる。第1小期は様相差により新・古の二者に分割できる。古に属する窯跡として黒川2号窯（高松町）、新に属するものとして洲衛窯[10]（輪島市）、池崎窯[11]（七尾市）等が該当する。

供膳形態では高台付盤が消滅し、器種構成はおおむね無高台の杯、皿、その中間的なものおよび高台付杯では小型のもの、中型のもの、大型のもの、からなり、器形が整理され規格化する。ただ、無高台の杯と皿の中間的なものとした例は、北加賀から能登地域で顕著に認められるもので、南加賀では少ないようである。現状では「国」ないしはそれより若干狭域を単位とした地域色の現われとしてとらえられよう。瓶類では古墳時代以来の伝統を持つ長頸瓶が消滅するとともに、器形では口唇部が著るしく発達する。この変化は煮沸用の甕等でも指摘できるがその発達はII_1小期の新段階でピークを向える。また、当該期の器種構成に甕・鍋・甑等煮沸形態のものがかなり多量に含まれていることも特筆できよう。その他II_1小期新段階の杯には、土師器を模した器形に底部糸切り手法をともなうものが少量認められる。この種のものについては、第III期への胎動の開始とみる見解もあるが、後続するII_2小期の様相がかならずしもII_1小期新段階の動きを押し進めるものとして評価できるものでないことから、現状ではIII段階への展開の端緒としてではなく、煮沸形態への須恵器の進出と表裏一体をなす現象と理解しておきたい。

当該期の土師器には良好な一括資料が見られないが、藤江B遺跡[12]（金沢市）、勅使遺跡群[13]（加賀市）等で当該期まで遡上する内面黒色土器を見ることができる。

〈第2小期〉　須恵器はII_1小期のあり方を墨守するが、窯跡数は急速に減少していったと推定される。土師器は供膳形態への進出が目立つ段階で、II_1小期以前の土師器と須恵器の機能別生産体制に崩壊のきざしが顕著となる。ただ、当該期の供膳形態の土師器は、須恵器のそれを凌駕するようなものではない。当該期に属する須恵器窯としては給分小袋窯[14]（富来町）、集落跡等では深江遺跡[15]（羽咋市）寺家祭祀（上層）遺跡[16]（羽咋市）等で良好な資料が出土している。

須恵器はII_1小期の器種・器形を受け継ぐが、器形のバランスを崩した粗雑なものが多くなる。杯は口辺部の外傾が著るしくなり、高台は外方にふんばるものから下方へ突き出したものとなり、萎縮する。また、体部下半にはロクロ技術の底下によるためか襞が目立つ。蓋のつまみは宝珠様のものから頂部の平坦な浮文状のものへと変化し、口辺部先端の折り返しは肥大し、先端が内屈する。この傾向は瓶や煮沸形態の甕の口辺部についても指摘でき、II_1小期に発達の極を向えた口辺部造作の肥大化が始まる。

土師器は供膳形態への進出が目立ち、III期以降に出現する器形のほとんどが出現すると推定される。具体的については明らかではないが、椀形態のものでは体部のはった深い椀形をなし、底部および体部は中途まで丁寧なヘラ削りを施す特色を持つ。ヘラ削りの手法は他の器形についても指摘でき、時期の下降につれその範囲が縮少し、省略されていく。時期判断の重要なメルクマールといえる。

III期　須恵器生産の衰退が決定的となり、それを補綴する土師器の量産化が進行した時期としてとらえられる。II期の供膳形態・貯蔵形態═須恵器、煮沸形態═土師器という機能別の生産分担は崩壊し、須恵器は貯蔵形態を主体としたものとなる。

当該期は3小期に分割してみた。従来より実年代の設定をめぐり論議にのぼっていた戸津4号窯期および三浦上層期は、それぞれIII_1小期新段階と、III_3小期に位置づけてみた。なお、III_3小期は供膳形態の土師器がIII_2小期の系譜でとらえられる点と、須恵器生産が存続しているのとの予測をもとにIII期に含めたが、今後の窯跡の発見ないしは、須恵器をともなった良好な一括資料の出現に待つべき部分が多い。結論を保留しておきたい。

〈第1小期〉　新・古の2段階に細分できる可能性を持つ。古段階のものとして須恵器窯では戸津9号窯[17]（小松市）、集落遺跡では古府しのまち遺跡[18]（小松市）土壙出土品。新段階のものとしては戸津4号窯[19]（小松市）、安養寺遺跡[20]（松任市）71号土壙出土品をそれぞれ該当させつつ検討中である。

須恵器（供膳形態）は先行型式からの系譜をもつ須恵器系の器形に加えて、土師器の器形を模したものが加わり両者が併存する。先者は底部ヘラ切り手法を用い、それに対し後者は土師器同様糸切り手法を採用しており、器形と手法はきわめて厳格な対応を示す。蓋は宝珠のないものが一般化する。新・古の様相差は漸移的であるが、土師器を模したものでは体部と底部の境にヘラ削りを施したものから、そうでないものへ、蓋は器高の高いものから扁平なものへ、また、高台は、外方へふんばったものから、下方へはり出すものへと変化する。須恵器系の器形に一部糸切り手法がとり入れられたり、甕の外面平行叩き、内面同心円文叩きという叩き手法の規則性が大きく崩れるのも新段階の特色といえよう。

集落遺跡の出土例では、土師器が供膳形態の過半を占める。時期の下降に従いその傾向は顕著になり、新段階ではほとんどが土師器となる。内面黒色土器および内面黒色土器の外面に赤彩した椀・皿類が多用されるのも当該期の特色である。調整手法では体部と底部の境が例外なくヘラ削りされ、底部もヘラ削りにより二次調整され、糸切り痕を留めないものが多い。高台を持つものはその内面をナデ調整したものが多く、体部内面もヨコナデ痕を留めないよう平滑に調整している。これら調整の特色は新段階も含めた特徴で、III_2小期で急速に衰退傾向を見せる。また、黒色土器内面のヘラ磨もII_1小期を通じて丁寧である。器種では新段階でもっともバラエティに富む。器形では椀形態に限れば体部下半にはりのもった深い椀形のものが多い。その他、当該期の大型甕の口辺部の器形の変化も著じるしく、時期判断の目安となる。胴部上半がヨコナデ調整のままで、カキメ状の調整を欠くのも当該期以降の特色である。

〈第2小期〉　須恵器窯では戸津3号窯[21]（小松市）、集落遺跡例では安養寺遺跡（松任市）91土壙の出土品[22]が該当しよう。

須恵器（供膳形態）では須恵器系の器形が激減ないし消滅し、土師器系の無高台の椀、高台付の椀および高台付皿のほぼ三者に統一される。器肉はIII_1小期に比較して厚くなるが、器肉にしまりのない軽い感じのものとなる。高台は萎縮する。それに対して土師器は、III_1小期の傾向をさらに押し進めたものとなり、供膳形態に占める土師器の割り合いは100％に近いものとなる。黒色土器、外面赤彩土器の減少、ヘラ削り手法の退化、黒色土器内面のヘラ磨の粗雑化等、調整手法の退化が顕著になるとともに、当該期に至って器形の斉一化も進行する。土壙91出土品より後出の一群と見なされる安養寺20・50土壙[23]出土品や、大口遺跡（辰口町）溝状遺構出土品ではこの様相はさらに顕著となる。この一群の所属についてはIII_2小期の新段階と見なすか、III_3段階の古段階と考えるか結論を保留しておきたい。

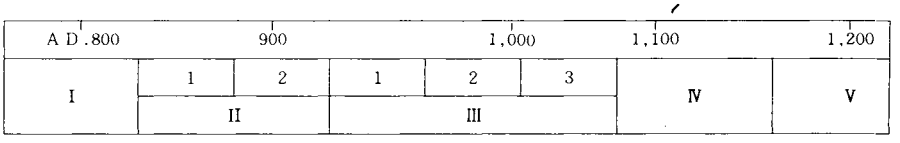
〈第３小期〉　須恵器窯は確認できていない。集落跡では安養寺（上林地区）遺跡[24]（鶴来町）７・８号土壙出土品あるいは三浦遺跡上層出土品[25]の一部が該当しよう。

土師器（供膳形態）は多量の無高台の浅い椀（88～95、103～109）と高台付の椀および少量の萎縮した高台付の皿のおおむね三者に統一され、規格的なものとなる。三浦遺跡上層出土品中の大型の無高台・高台付椀等については、当該期に含まれるかどうか検討を要する。内面黒色土器は激減し、外面朱彩の土器はほとんど認められなくなる。また、ヘラ削り手法も認められなくなる。

須恵器は窯跡が確認できないことと、集落跡の須恵器をともなった良好な一括資料が見られないことから、具体相は明らかでない。三浦遺跡上層出土品では供膳形態の須恵器が認められず、貯蔵形態のそれは、先行する土器群との系譜でとらえられる一群と、明らかに搬入品と推定される一群とが混在している。ただ、三浦遺跡上層出土品は少なくともIII_2小期までは遡上する資料を含んでおり、先の須恵器のそれぞれの帰属は現状では明らかでない。当該期の須恵器の在り方は保留すべき点を多く残しているが、先の三浦遺跡上層出土品の在り方から見て、須恵器生産が存続していたと仮定しても、その需要をまかないきれない程度の不安定なものであったと推定しておきたい。

また、当該期の土師器も、先行型式に比較して器形の萎縮、調整の粗雑化が著じるしく、器種も単純化している。須恵器生産の廃絶と軌を一にした土師器生産転換の前夜と考えられないであろうか。

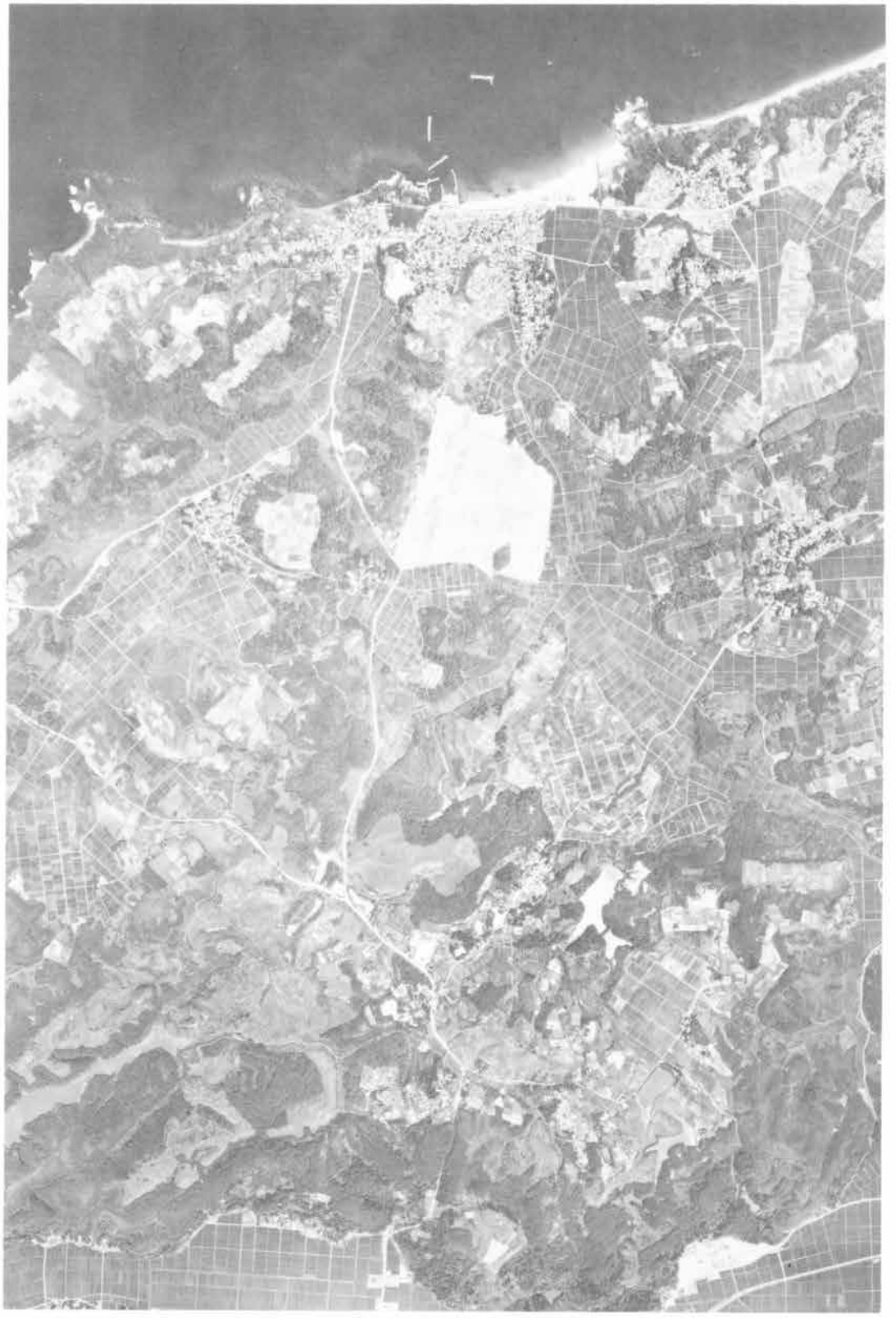
年　代　年代を推定できる資料はきわめて乏しいが、一応の予測として推定したのが下表である。



Ⅰ～Ⅳ期の内、ある程度年代を推定できるのはⅠ・Ⅳ・Ⅴ期である。Ⅰ期は弘仁２年（818）に成立した東大寺領横江荘々家跡出土品を視標として９世紀前半代の土器群と推定した。ただ、この推定は９世紀前半代と推定される平城京東三坊ＳＤ 650 Ａ出土の三耳瓶が、Ⅰ期の戸津５号窯出土品に酷似していることで問題を残すが、仮にⅠ期を９世紀後半代の土器群と理解した場合、奈良時代後期の土器群が欠落してしまうこと、東大寺領横江荘々家跡の位置づけが崩壊してしまうこと等より妥当なものと考えている。Ⅴ期は弘安２年（1167）の在銘経筒と共伴した富山県日石寺裏山経塚出土の珠洲焼資料により上限を推定することができる。また、Ⅳ期は先に触れた通り、寛治５年（1091）に存続した土器群ととらえられる点を根拠としている。

以上、平安時代の土器編年を須恵器・土師器からながめ、最後に根拠薄弱なまま、年代について触れた。本稿を書き終え、各時期の具体的資料検討がきわめて不充分であったとの感を禁じ得ない。今後は共伴する灰・緑釉陶器や、当該期にきわめて顕著となる地域色等についても配慮しながら検討していきたいと考えている。多数の方々の御批判と御教示をお願いしたい。

註１　田辺昭三　吉川義彦　『平安京発掘調査報告―左京四条二坊―』　平安調査会（1975）
２　石川考古学研究会　『加賀三浦遺跡の研究』（1967）
３　奈良国立文化財研究所　『平城京発掘調査報告』Ⅴ（1975）
４　阿部義平・高島忠平・橋本正・舟崎久雄　『井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会（1974）　等に代表されよう。
５　注２に同じ
６　注２に同じ
７　小村茂・宮下幸夫他『戸津５号窯』　石川県教育委員会　（1979）
８　註２に同じ
９　吉岡康暢　『史跡東大寺領横江荘々家跡』
10　吉岡康暢　「洲衛古窯址群」『石川考古学研究会談』10　（1966）
11　浜岡賢太郎「池崎第１号窯」『七尾市史・資料編』４　（1970）
12　『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』　石川県教育委員会　（1975）
14　浜岡賢太郎「第６節・古窯跡」『富来町史・資料編』（1974）
15　高橋裕　『羽咋市深江遺跡（第１・２次）』　石川県教育委員会　（1975）
16　小嶋芳孝氏教示
17　筆者実見
18　小村茂『古府しのまち遺跡』石川県教育委員会　（1974）
19　筆者実見
20　中島俊一他『安養寺遺跡群発掘調査概報』石川県教育委員会　（1975）
21　筆者実見
22　註20に同じ
23　註20に同じ
24　湯尻修平『安養寺遺跡群調査報告』石川県教育委員会　（1975）
25　註２に同じ



遺跡周辺の航空写真

遺跡遠景（南東方向より）

遺跡全景（北方向より）

遺跡全景（南方向より）

掘立柱建物群近景（北方向より）

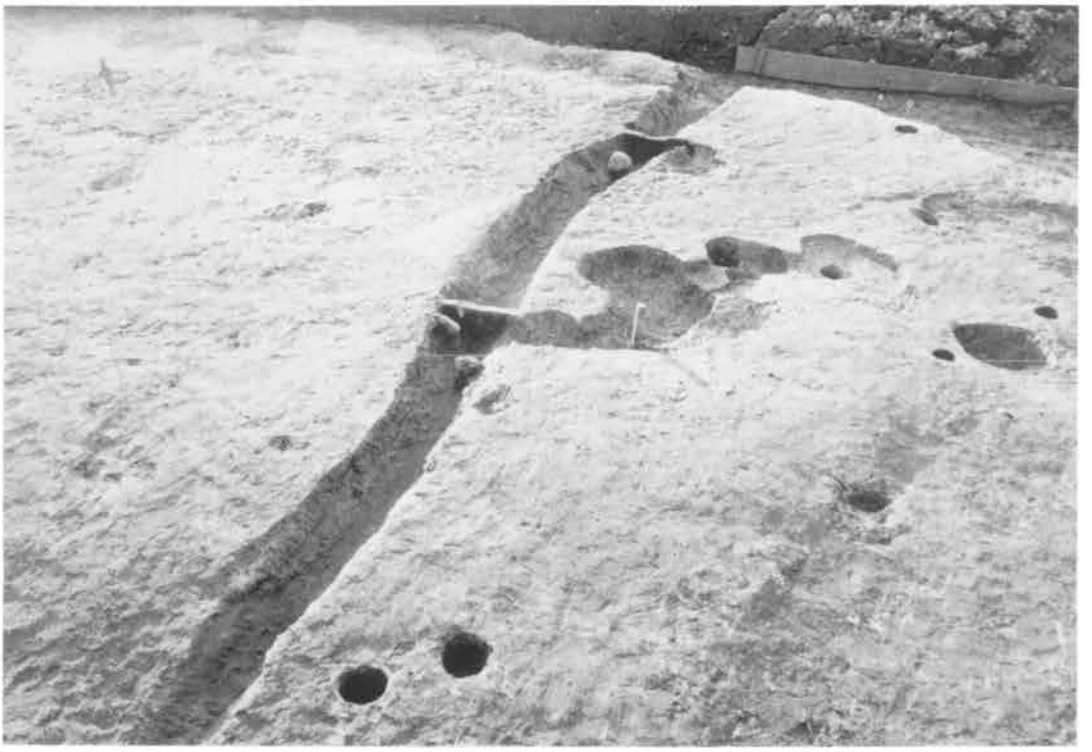
掘立柱建物群近景（南方向より）

01・02大溝全景（北方向より）

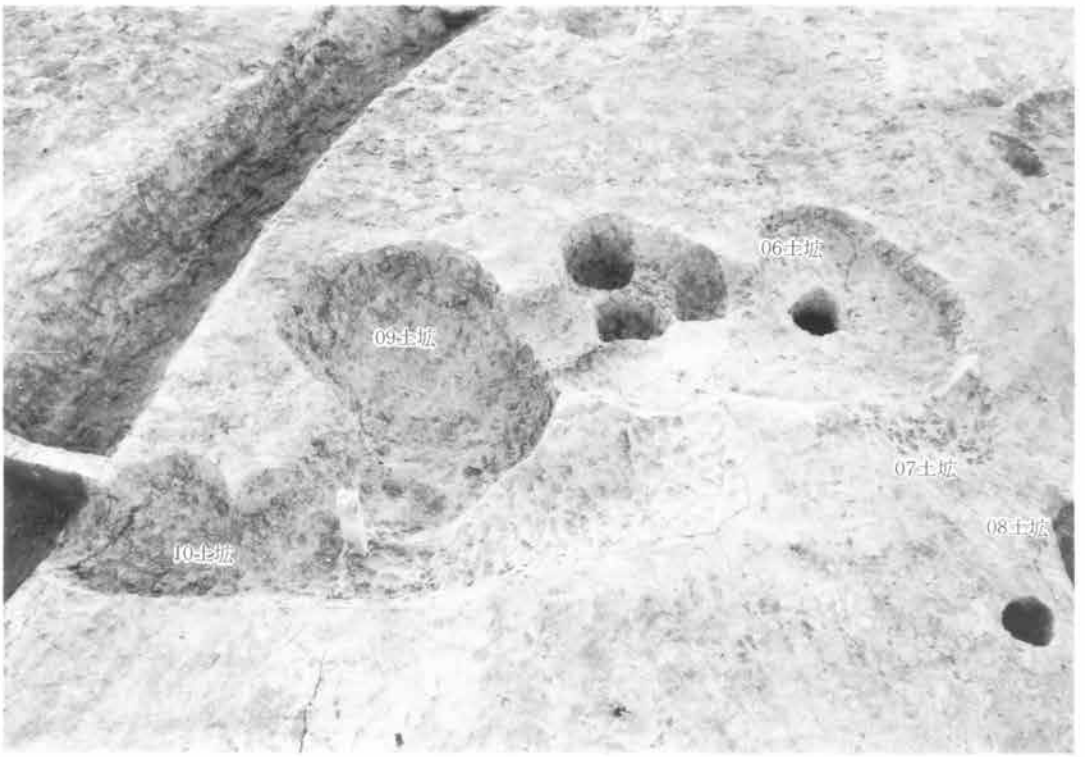
01・02大溝遺物出土状態（東方向より）

01溝近景（東方向より）

01溝及び01・02大溝近景（南方向より）

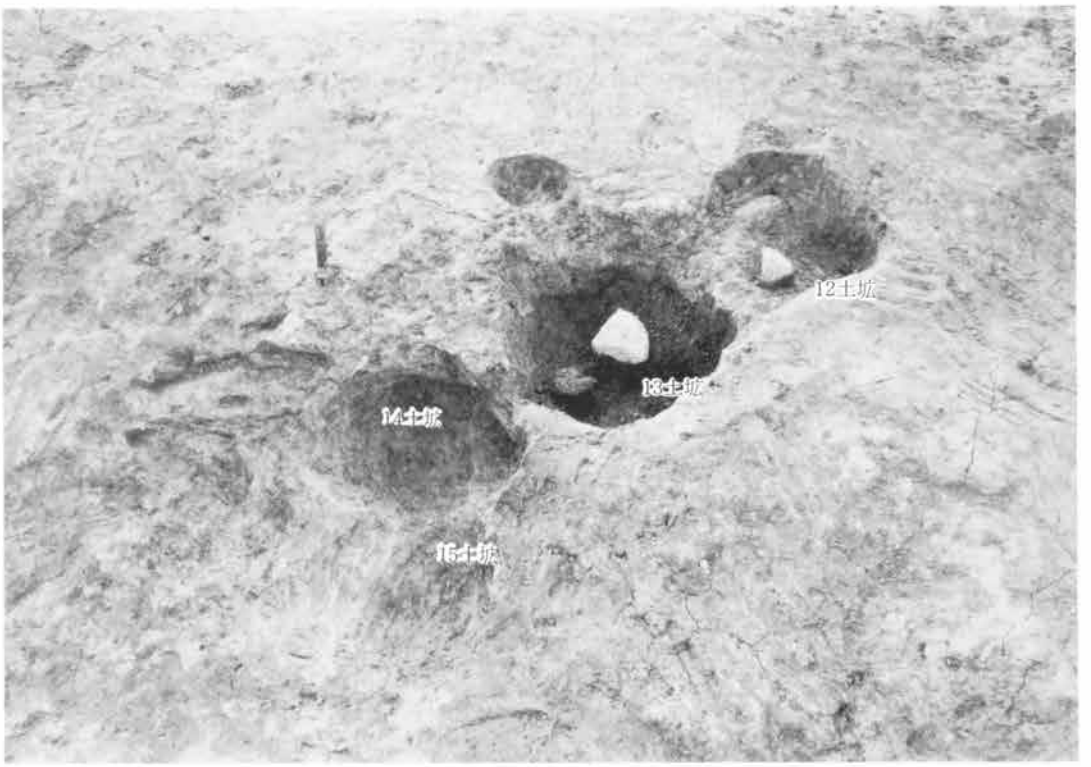


01溝及び04～10土坑全景（東方向より）



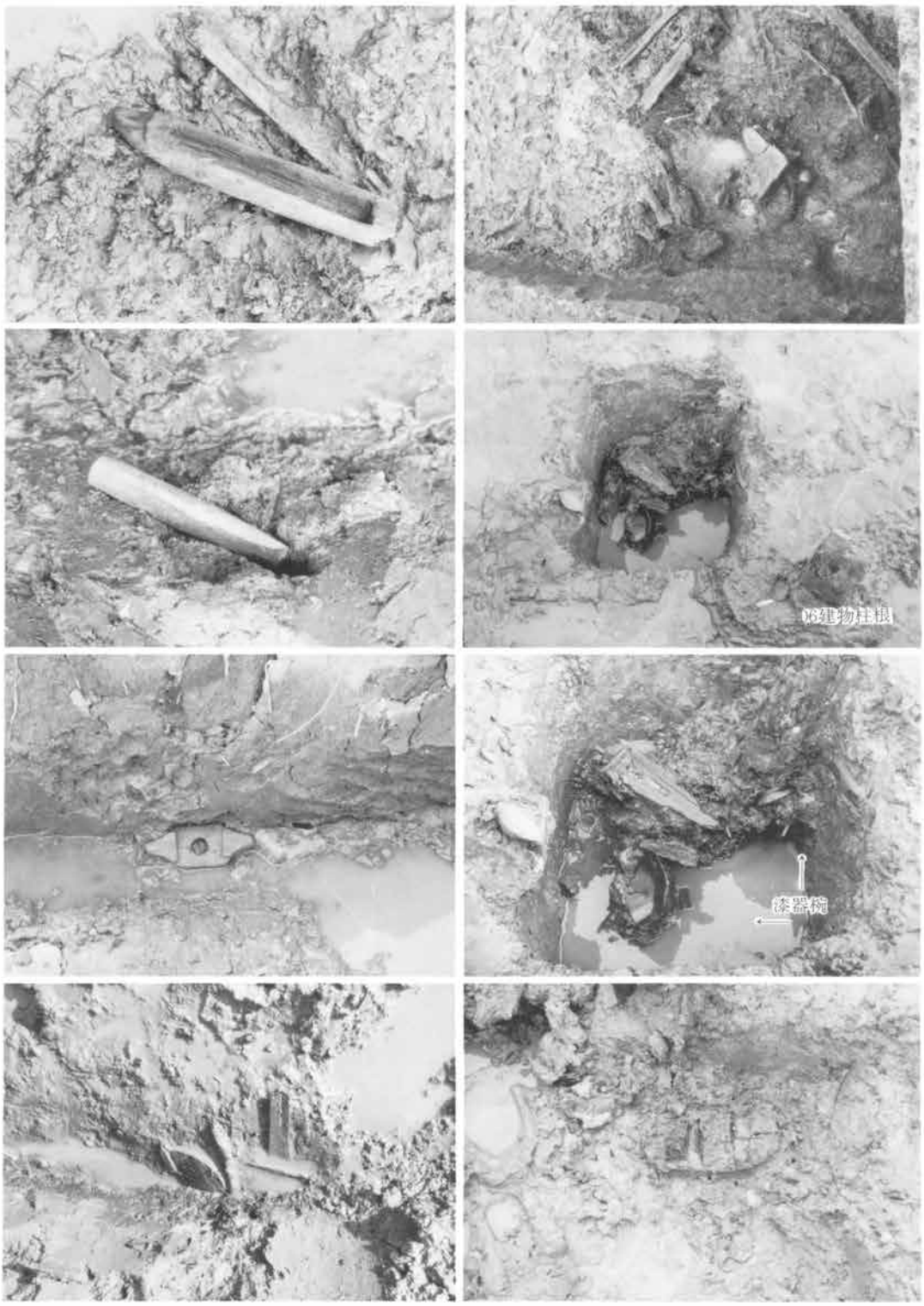
06～10土坑近景（東方向より）

01・02大溝と01土坑



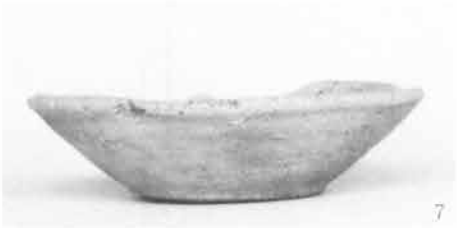
12～15土坑近景（東方向より）

不定形遺構群全景（北方向より）

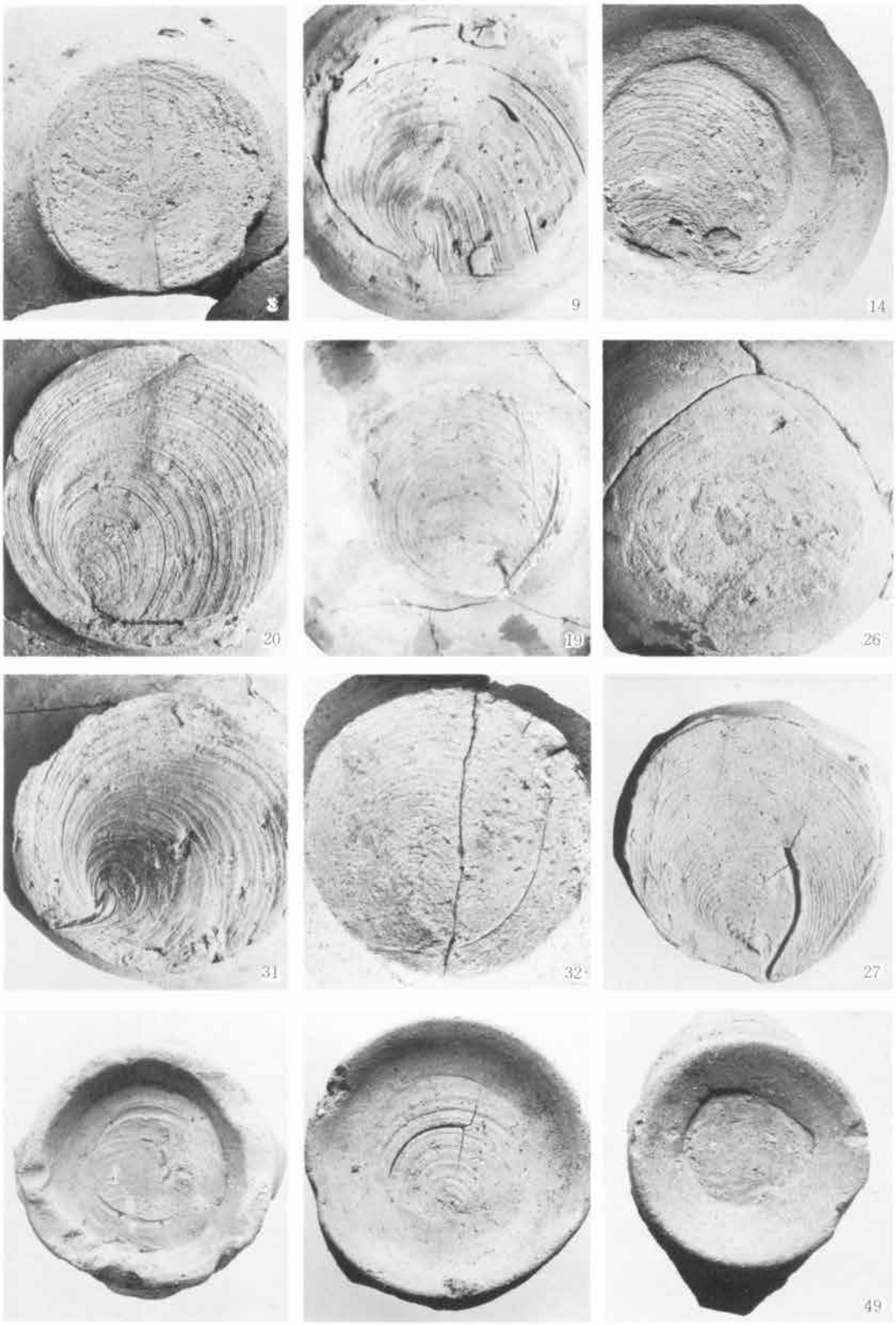


遺物出土状態

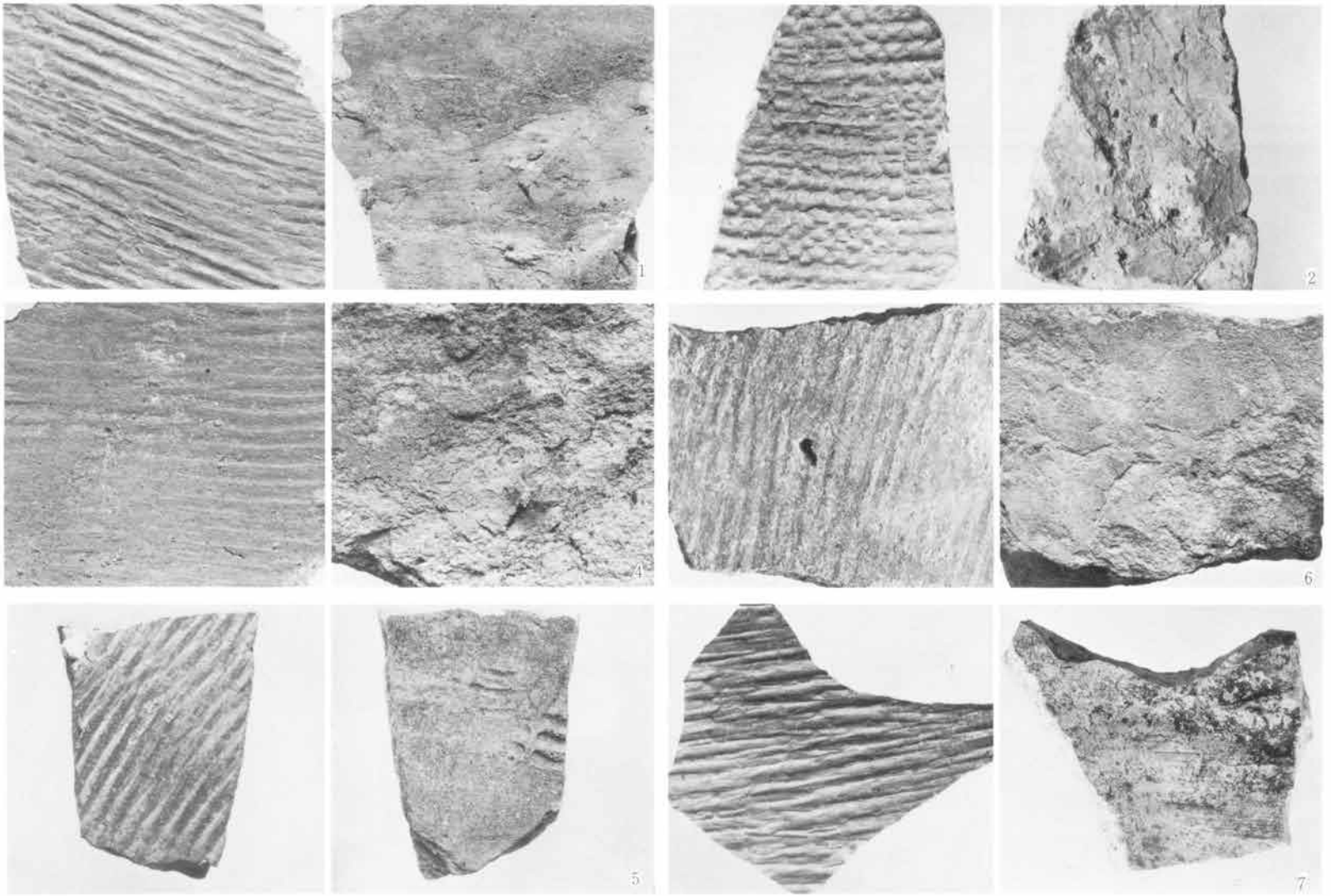
左1	舟形木器	(01大溝)	右1	土師器・木器	(01大溝)
左2	刀子鞘	(01大溝)	右2	漆器椀他	(01土坑)
左3	糸　車	(01大溝)	右3	〃	(01土坑)
左4	オケ底	(01大溝)	右4	下　駄	(第2調査区)



土師器

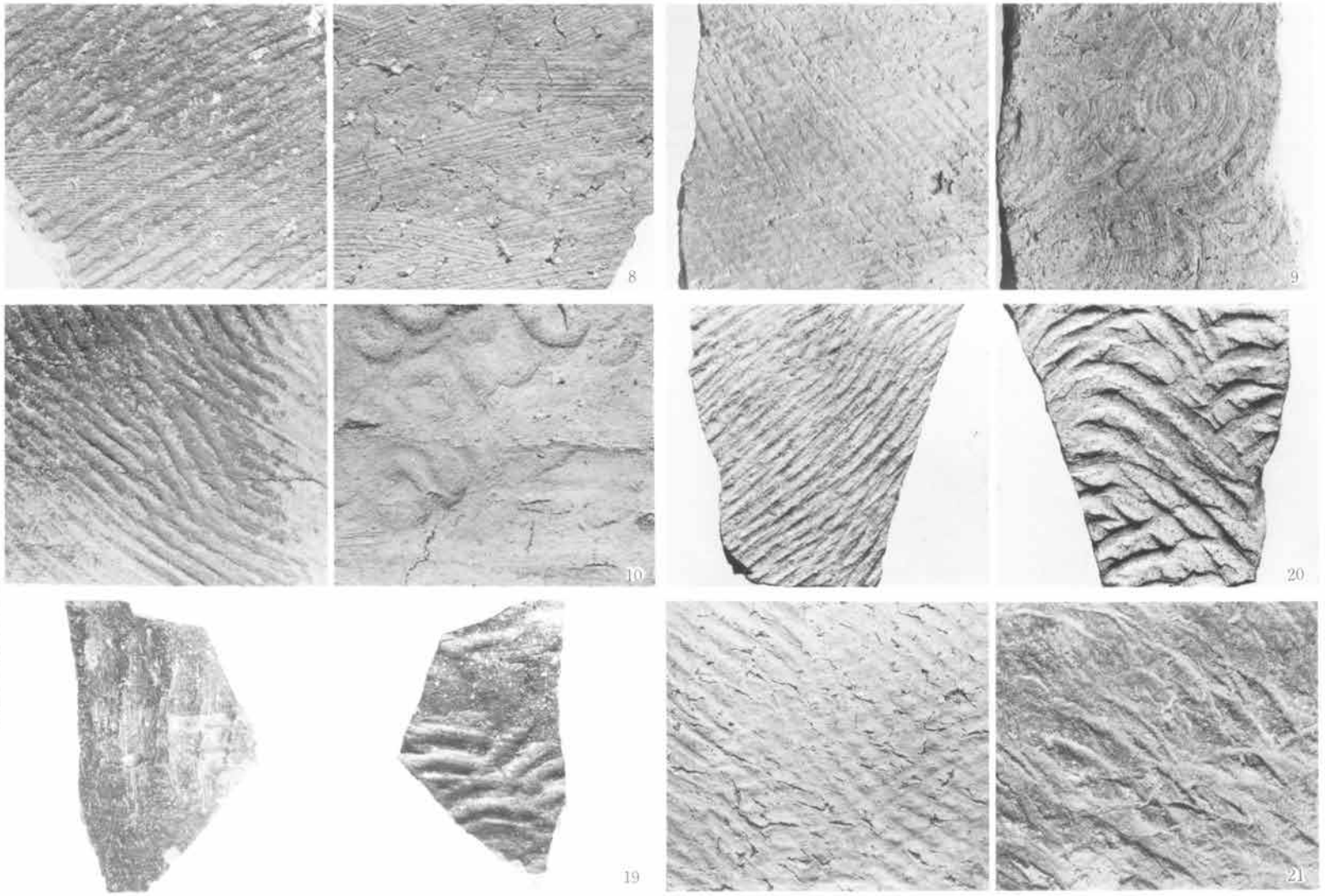


土師器（底部調整）



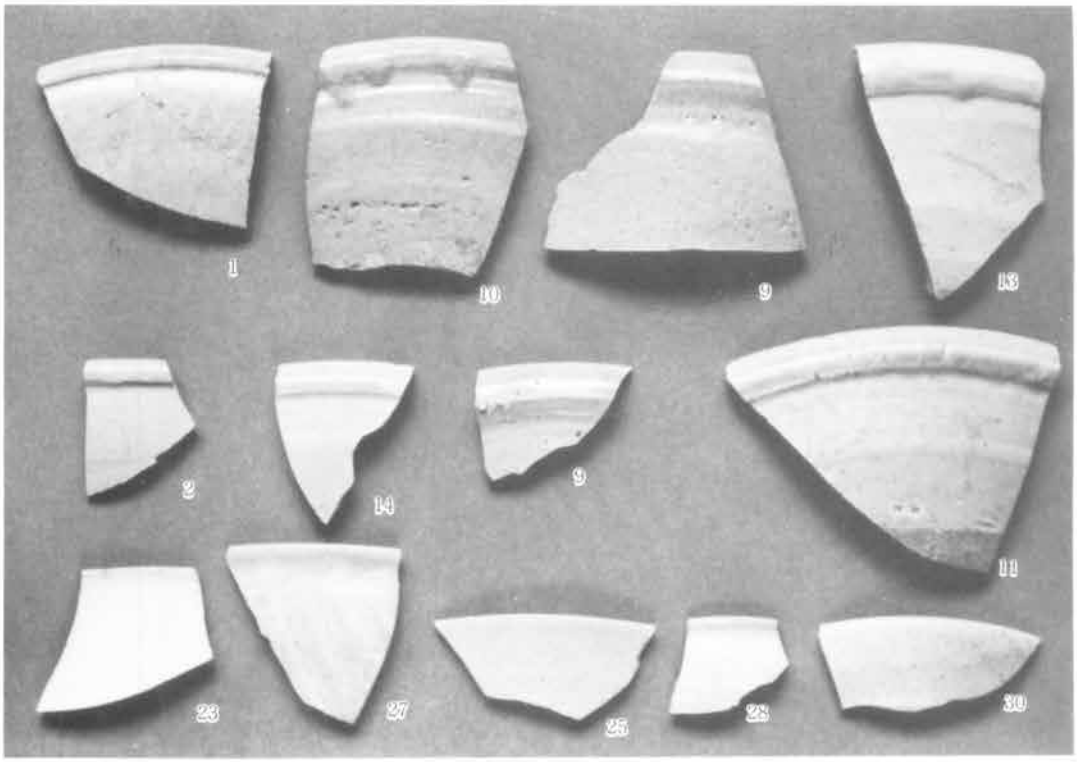
須恵器（器面調整）

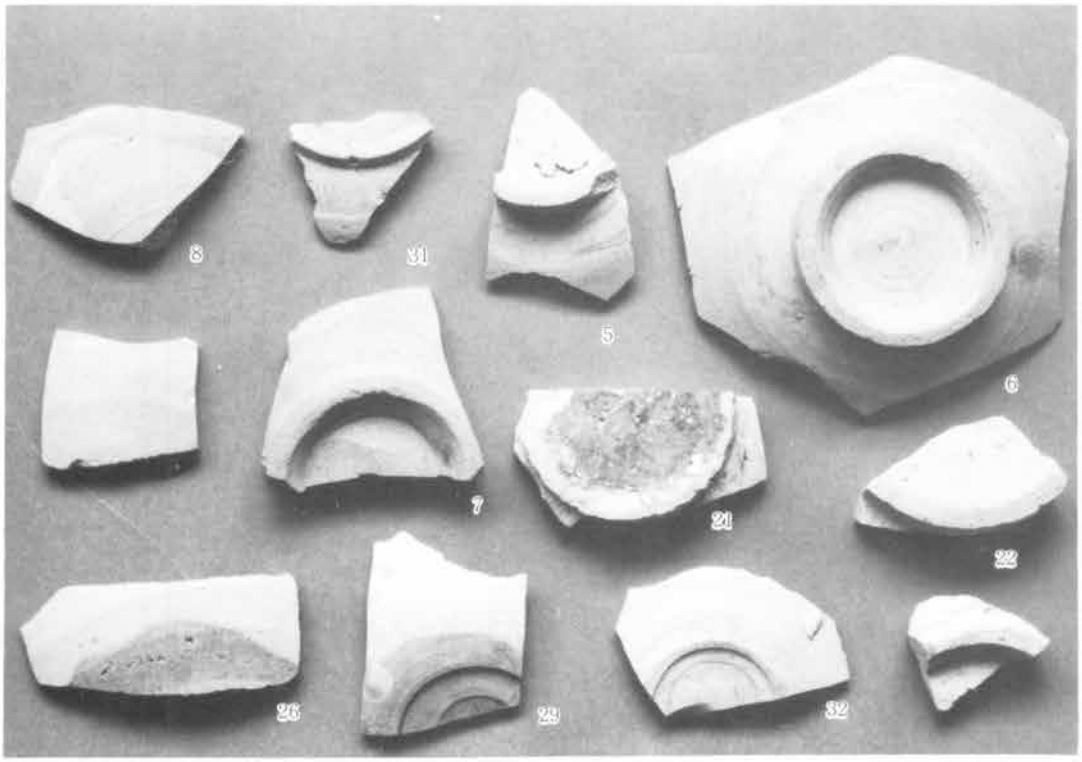
図版12



須恵器（器面調整）

図版13





白磁

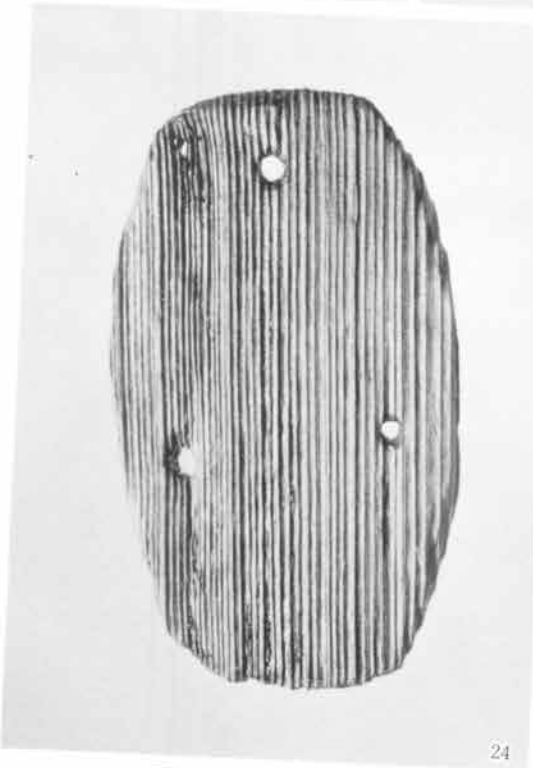
2

1

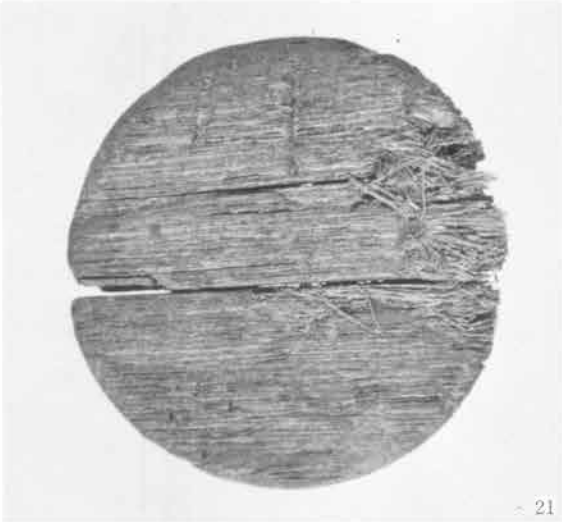
4

12

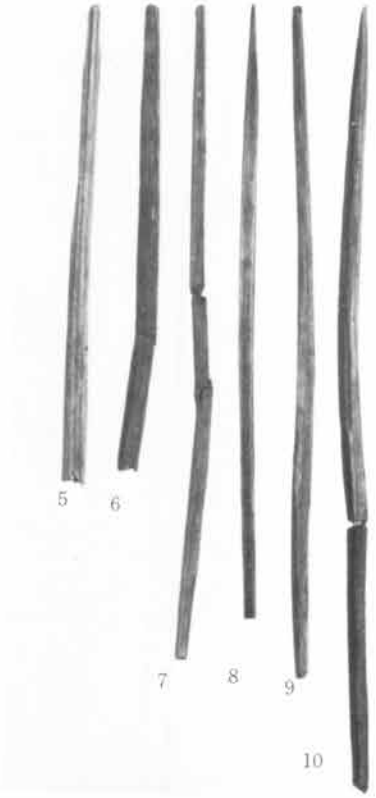
漆器椀及び舟形木器

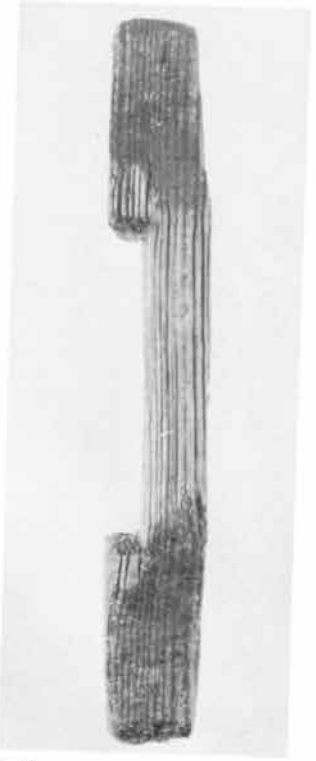


下駄

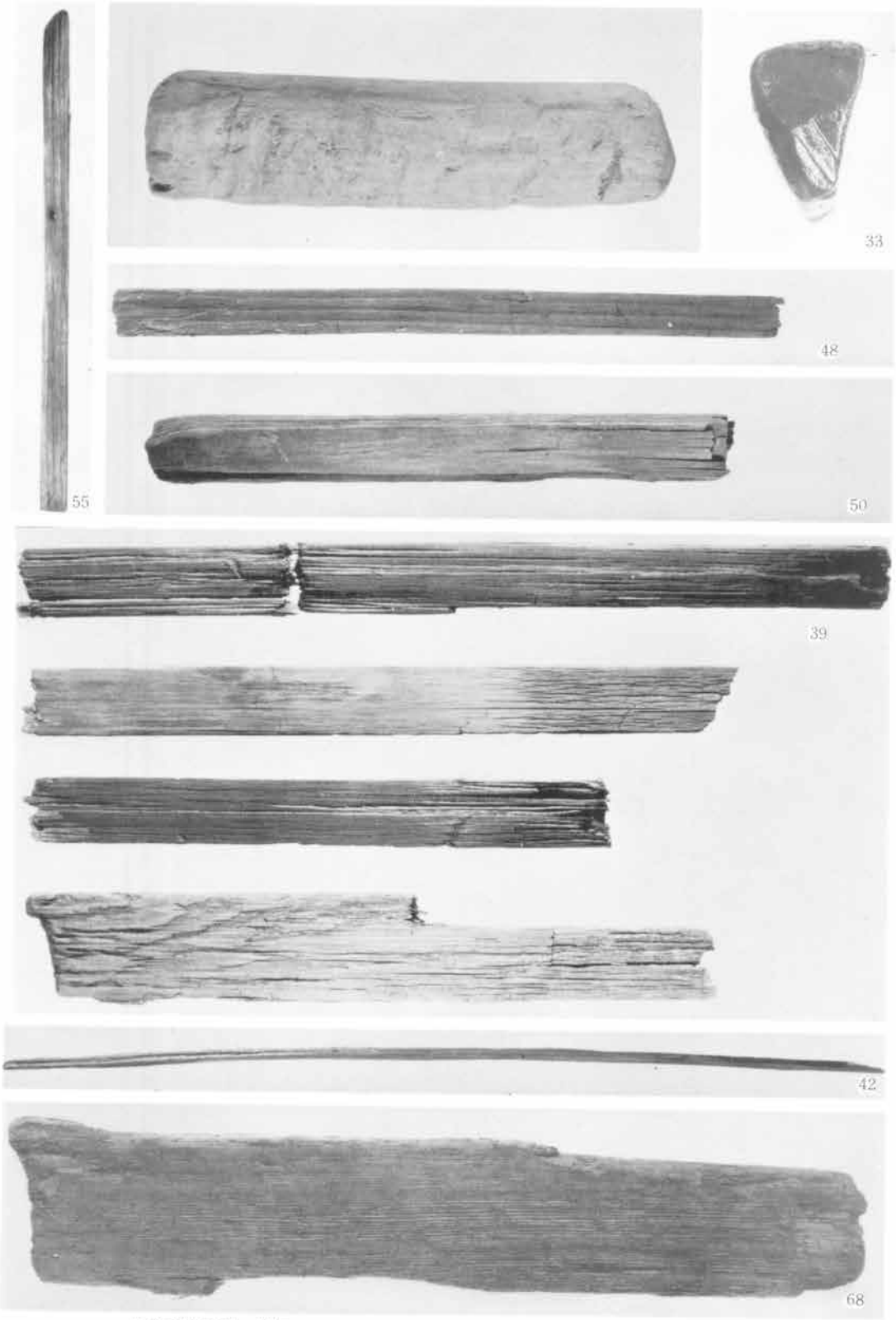


桶（底）　用途不明木器

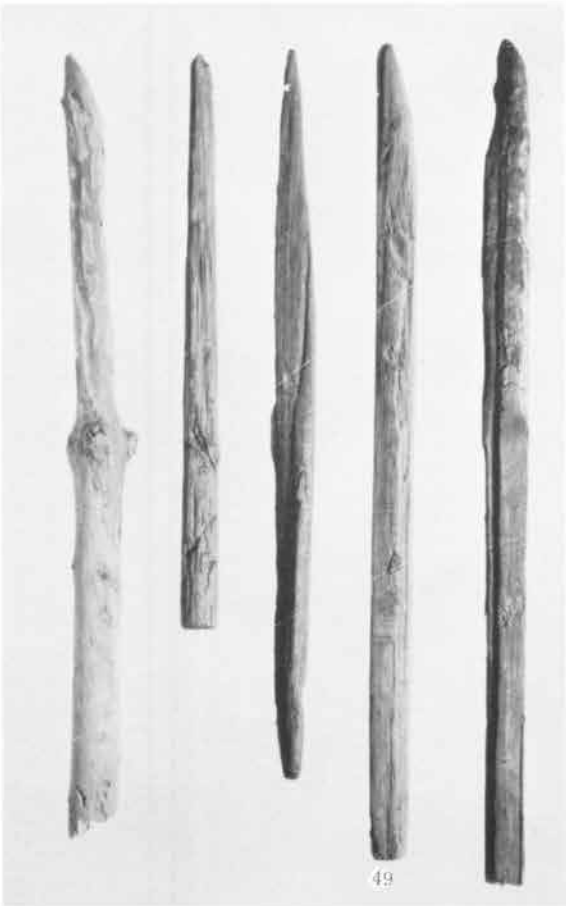




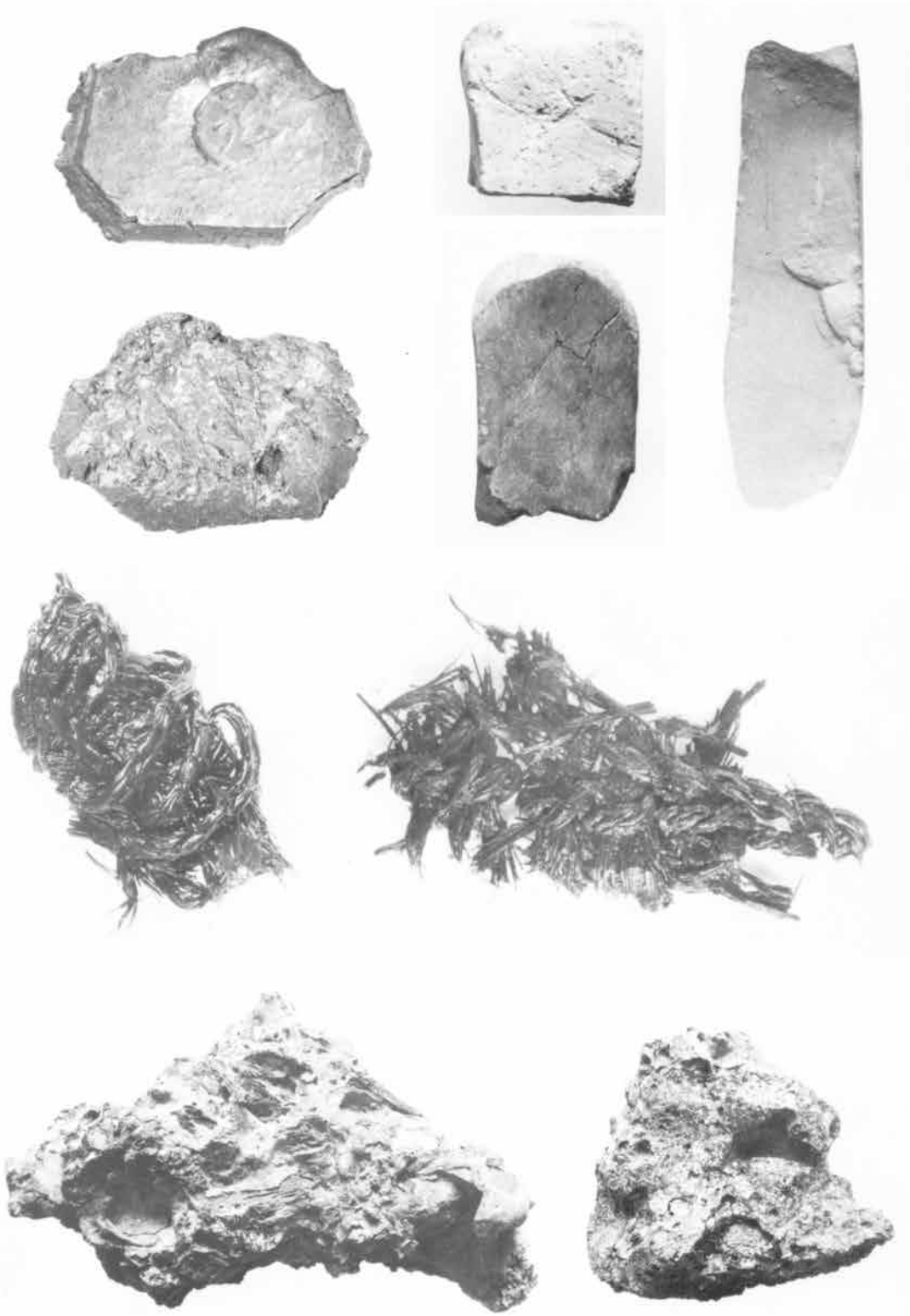
箸状木器・糸車・用途不明木器



用途不明木器・剝板



杭材等



その他の遺物（延板状純銀製品、砥石・羹製品・鉱滓）

加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書

昭和54年3月31日

発　行　　石川県教育委員会
　　金沢市広坂2－1－1
印　刷　　中川大正印刷㈱